書　評

色川大吉著『ユーラシア大陸思索行』（中公文庫，1976年）

杉　野　圀　明

目次

はじめに
①何ゆえにかくも走る（氷河から砂漠まで）
②南蛮文化の母国から（ポルトガル）
③血で描かれた叙事詩の跡（スペイン）
④閑雅な田園・豊かな底辺（フランス・北欧）
⑤ロマンチック街道をゆく（ドイツ・オーストリア）
⑥バルカン三国のかげり（ユーゴスラビア・ギリシア・ブルガリア）
⑦アジアの風塵の中へ（トルコ）
⑧砂漠の白昼夢（イラン）
⑨曠野の道・荒野の人（アフガニスタン）
⑩聖なる大地に生きる（パキスタン・インド）
おわりに

はじめに

本稿は，色川大吉著『ユーラシア大陸思索行』（中公文庫，1976年）という書物の紹介だけではなく，色川氏の「思索」に対する私の論評も加えている。それだけではない。「思索行」の「行」についても，私の経験したことと突き合わせて論評している。

もっとも，色川氏のいう「行」の内容であるが，それは次の文章の通りである。

「1971年７月から11月まで『ユーラシア大陸学術調査隊』（仮称：どさ廻り調査隊）はリスボンを振り出しに，ヨーロッパ・中近東を回りインドまでの約4000キロを自動車により調査旅行した」（同書，264ページ，北野比佐雄）という調査旅行のことである。

そのような調査旅行について論評するためには，それだけの国や地域について相当の予備的知識や見識がなければならない。

そこで私の旅行歴を確かめると，ヨーロッパ諸国とトルコ，パキスタン，インドは年次を異にしても既踏であり，イランとアフガニスタンについては未踏である。しかも，私が世界旅行した年次は著者のそれよりも10年ほど後のことであり，パキスタンやインドについては，もっと後のことである。

もっとも私は年次を異にしながらも，南北アメリカ大陸，旧ソ連圏，西域を含む中国，東南アジア，北・南アフリカ，豪州，南太平洋などの諸国・諸地域を巡検してきている。それらの国々や諸地域で得た知識と経験を活かすなら，幾分なりとも色川氏の「調査旅行」について論評できるのではないかと思う。

続いて，著者色川大吉氏の経歴を簡単に紹介しておこう。

色川氏は1925年，千葉県の生まれ。東大文学部へ入学するも，学徒出陣。戦後に復学し，東大を卒業。その後の経緯はともかく，1967年，東京経済大学教授となり，1996年に定年退職，名誉教授となる。専門は日本近代史，民衆思想史。1970年にプリンストン大学に招聘され，客員教授となった。「1971年（昭和46年），キャンピングカー化したフォルクスワーゲン・タイプ『どさ号』に『リスボン―東京５万キロ』と標語を貼り付け，友人ら数人とユーラシア大陸を走破。それをふまえ『ユーラシア大陸思索行』（平凡社，1973年）を刊行，1976年に中央公論社より「文庫本」（本書）としても刊行。2021年９月，死去。享年96歳。（「ウィキペディア」より作成）

なお，上記の経歴の中では，服部之総氏が創設した日本近代史研究会のメンバーであったことが記載されている。また，今回の旅との関連では，色川氏は東京経済大学に在職していたので，経済地理学者の入江敏夫教授と接触があったのではないかと推測する。

以上述べたような色川氏の経歴を踏まえると，氏の「思索行」の背後にある思想および研究の専門分野，研究方法などをおおよそ推察することができる。

ところで，時は移る。色川氏が「ユーラシア大陸」を旅したのは1971年，そこでの思索を執筆し，刊行したのは1973年，私（杉野）の世界一周旅行が1981～82年。米ソ対立に代表される東西両体制対立の時代から，社会主義体制が崩壊した1990年代。さらに多くの年を経て，色川氏が逝去した2021年，そして私が本稿を執筆した2022年。本稿には，色川氏が旅してから，およそ半世紀という時の流れがある。

もとより色川氏の「思索」と私の「論評」には，それぞれの異なった生い立ちから，時代の社会経済的諸現象に対して，それらを客観的に分析し，現代の諸問題を考察していく視点や方法に違いがあっても不思議ではない。だが同時に，同じ国や地域を対象として取り扱う以上，方法論としては「総合性」という点で，また認識結果についても色川氏と私の間には，ある程度の共通性があるのではないかと思う。敢えて論及する次第である。

現実の国あるいは地域の社会経済を分析し，問題点を解決する政策を提起し，社会経済の構造的な運動法則を理論化する場合には，どうしても政治経済関係（階級・階層関係）を踏まえることが必要である。

ちなみに各国・地方の諸事象を分析する場合，単に現象として現れる事物に限定して，その統計数字をとりあげ，計数的に比較，あるいは指数的に傾向把握する方法だけでは，その場における「生きた現実」を正確に把握することは出来ない。「生きた現実」を把握するためには，階級・階層関係に規定された利害関係はもとより，生活環境，生業関係，交通関係，政治関係，文化芸術関係，民俗慣習，思惟・思潮関係など複合・重層的な諸関係を含めて総合的に把握する必要がある。

本稿が「政治経済」視点を意識し，色川氏の「思索」に接近したのは，諸国や諸地域における政治や経済をも含めた視点から，換言すれば階級・階層視点も含めて総合的に検討対象に接近し，

論及しようと思ったからである。

ともかくも，色川大吉氏の「ユーラシア大陸」調査旅行を読み，かつ広域的に，かつ総合的に論評してみたものである。

本書は，著者をはじめ数人による1971年の自動車旅行で，書名の通りリスボンからカルカッタまでの，いわゆるユーラシア大陸横断紀行である。だが，内容は，「思索行」とあるように，単なる旅行記ではなく，その国や地域の諸事象を紹介すると同時に，それらについて著者が「思索」したものである。

したがって，私のように日々の行動を記録するという旅日記方式の旅記録とも異なる。さらにユーラシア大陸とはいっても，ロシア，中国，東南アジアなどを含んでいないから，正確には「ユーラシア大陸部分紀行」ということになろう。

本書は，著者たちが走破した国々を基準にして，10編（序文を含む）から構成されているので，私の論評も，この構成に従うことにした。なお，本稿では，諸般の事情から本書での地名を必ずしもそのまま使用していない。また本書からの引用文は煩雑を避けるために，その文末にページ数のみを記すことにした。

①「何ゆえかくも走る」（氷河から砂漠まで）

著者にこの旅をさせたのは，「若い魂は時代閉塞の情況のなかで悩み，苦しんだ。そのころの私の最も大きな楽しみは，アジアの奥地を奔放にかけ回る空想だった」（7～8ページ）という一文に現れている。著者のいう「アジアの奥地」が具体的にどこなのか判らないが，若き日に私が夢見たのは，シベリアのバイカル湖であり，モンゴルからジュンガル原野（盆地）までの大草原だった。

著者がこの大旅行をする契機となったのは，1969年，アメリカのプリンストン大学からの招聘であった。そして1971年6月1日に，その旅は始まった。名前は「ユーラシア大陸学術調査隊」。だが，その実態は，歴史家，法律家，カメラマン，記録係，エア・ホステスなど多彩な顔ぶれで，しかも常にこの6人が同行したわけではない。

使用した車は，フォルクスワーゲン1971年型（1600cc）の小型車。エンジンは60馬力で強力だったらしい。そして1971年の11月末にボンベイから空路で帰国したとなっている。

年代的には，私の世界一周旅行（1981年）よりも丁度10年前の旅である。私の場合は，その殆どが一人で，列車とバスそれに船舶（フェリーや貨客船）を乗り継ぐ旅であった。著者の旅とは，それらの点で異なるが，リスボンからイスタンブールまでの旅とインドやパキスタンの旅については，私も経験しているので，読み切るのが楽しみである。

②「南蛮文化の母国から」（ポルトガル）

ポルトガルの旅は首都のリスボンから始まる。「リスボンは七つの丘と天然の河港にめぐまれた古い町である」，「大西洋からテージョ河がひろびろと入り込んだところ」（17ページ）と説明している。確かに，テージョ河に面した岸壁に立ったとき，私の感じた印象は，この描写と殆ど同じであった。ただし，対岸までは大きな橋が架かっていた。

私がリスボンを訪れたのは，筆者たちよりも10年後だから，その当時にはまだ橋は架かってい

なかったのかも知れない。

私は，著者の言う七つの丘の一つに宿をとったが，そこは城塞の跡で，そこまでは小さな市内電車がアプト式だったか，歯車をつけながら登っていた。古ぼけてはいたが，それなりに風情があった。

なお，著者によれば，リスボンに日本人が最初に来たのは1584年で，のち彼らはコインブラも訪れたと記している。著者たちはリスボンにある「ベレンの塔」を見学したのち，ロカ岬まで訪れている。これはポルトガルの一般的な観光コースで，私も経験している。

リスボンには巨大なエリンケ王子の記念塔，その近くの「ベレンの塔」。その基台周辺の地面に世界各地と，そこへポルトガルが初めて到達した年次を刻んでいる。超歴史的観点からみるなら，彼らポルトガル人も，世界の旅に出れば，私と同じく異邦人であり，そうした旅の記録を残すということが強い魅力だったのであろう。そうした記録が，私に強い印象を与えた。

それから忘れてならならないのは，ポルトガルの民謡ファドである。著者はそのファドを聞くために「古いレストランにくりこんだ」（18ページ）らしいが，私は通りに面したレストランの横から暫しの間，それを流し聞いただけである。貧乏旅行だから，高級レストランを利用するのにも気が引けるからだ。今にして思うと，無理をしてでもレストランに入ってファドの哀愁にみちた音楽をじっくり味わうべきだったと後悔している。地域に特化した音楽や民謡は観光資源となる。ファドの起源も，異国での旅愁だったかもしれない。

続けて，コインブラ。私が大学一年の時，蓄膿症の手術をして門司（小森江）の市立病院に入院した。その時にの病室に流れていたのが「ポルトガルの四月」（ポルトガルの洗濯女）であり，それがコインブラの民謡であった。またコインブラ大学がヨーロッパでも最古の大学であるということが頭の中に強く残っていた。もとよりそこも訪れた。

このコインブラは「美人が多い」とか「ポルトガルのアテネ」（19ページ），「ポルトガルの京都」（20ページ）という世評を著者は，紹介している。だが，著者はそうした世評にはどうも納得していないようだ。

それにしてもコインブラ大学の創設は，1307年というから，今から計算すると，もう715年も昔のことになる。著者は「古い講堂，古い図書館」（20ページ）と記し，「中世的な貴族社会の雰囲気をただよわせ」（同）と綴っている。

私も，その講堂や隣接する建物（文学部？）を見学したが，確かに「中世的雰囲気」があった。このことは確かである。だだし，私が図書館を見学しなかったのは失敗だった。著者もその図書館についての記述を欠いている。だが，ここの図書館は，世界でも指折りの図書館だとテレビで紹介され，その豪壮さはもとより，蔵書の素晴らしさには感嘆すべきものがあった。特色のある大学は，世界の観光資源となりうる。

著者は，日本から400年前に少年使節団がコインブラを訪れた時のことを，松田毅一氏の研究によりながら，紹介している。だが，それについては省略する。ともかくコインブラは日本とも関係のある都市である。

コインブラの情景について著者は，「眼下にモンデゴ川が青々と流れ，煤けた赤い屋根瓦がひろがっている。よくみると新しいビルも屋根を赤くそろえて，この古都の調和を破っていない。森と水と町と道とが暗黙のうちにみごとなバランスを保っている」（22ページ）と記している。こ

こに記されているのは，まさしく観光資源的景観である。

私には，そんな調和を感じる余裕はなかった。大学へ登っていく道に沿って楽器屋が多く，多くの学生がそれに興味を抱いて屯していた。それが印象として残っている。

そうだった。あのモンデゴ川を眺めて，あれが「女たちの洗濯する川だ」と強く思ったことを覚えている。ここでも「洗濯女」の音楽が観光対象となっている。

著者たたちはポルトに行き，それよりスペイン国境へと車を走らせている。なぜか，ポルトについての描写や思索は述べられていない。臨海部の埋め立てによるポルトの工業化がまた軌道に乗っていない時期だったからかもしれない。

観光用だと思うが，ドウロ河口に浮かべたワイン運搬船の情景，もっと言えば，大西洋沿岸にあるポルトガルの歴史都市などについて，著者は触れるべきであったろう。

スペイン国境に近い片田舎のアグレラ村およびセリナ村で，著者たちが遭遇したのは「教会の祭礼」である。そこに著者は「十字架を捧げて神妙に行進してゆく幼い純な魂たち。それを敬虔に迎え送る素朴な民衆の共同意志の中に，“生きている宗教”を感じた」（24ページ）と述べている。これは素晴らしい。現代社会における宗教の役割を認識すると同時に，信ずる宗派が異なっても，また無宗教であっても，宗教を大切にする人々の信仰を妨げてはいけない。もっとも宗教を理由にしての戦争や悪行は断固排斥すべきである。

著者がポルトガルで思索したのは，過去と現代も含めて，都市と農村，自然と人為，それら全ての調和ということ，さらに「生きている宗教への敬意」ということだった。

③「血で描かれた叙事詩の跡」（スペイン）

著者にとってスペインは「ヨーロッパ中でもっとも魅力のある国だった。また，もっとも悲しい記憶の国だ」（28ページ）としている。後の理由は，「33年間も同じ一人のファシストに支配されてきた国。労働者革命の挫折した国，インターナショナリズムの墓場となった国，国際義勇兵が絶望した国，そして勝利した独裁者が，……暴力装置をにぎっている国」（同）だからである。

私がまだ日本にいるときの印象だと，スペインは「闘牛とフラメンコの国」まさに「情熱の国」であった。それが1982年の旅をすることによって，また数多くの小説や絵画などを見ることによって，その印象は大きく変ったように思う。その中でも，強烈なインパクトだったのは「スペイン市民戦争」である。スペインを語るとき，この戦争のことを如何に論じるかが，スペインに対する見方の評価基準になってしまったようだ。

著者たちは，出発点のリスボンに至るまでの途中で，バレンシア，カルタヘナ，トレドをすでに旅している。これらの地域では監視の「眼」が気になったと，著者は記している。それはフランコの独裁時代だったからであろう。私が旅した1982年には，そうした「眼」を感じることはなかった。そうか，フランコは1975年に死んでおり，そうした「眼」は既に無くなっていたのであろう。

トレドでは，スペイン（市民）戦争の話が多くなる。トレドでは1936年のスペイン人民政府にたいする国際的支援と連帯の話。それからジョージ・オウエルの『カタロニア讃歌』の内容紹介。恥ずかしながら，私は『カタロニア讃歌』を未だ読んでいない。

続いて著者は，トレドのアルカザールを訪れる。そこにはフランコ軍の英雄的抗戦を讃える記

念館があるが，そこでの記念文は不当であると，いわば「軽蔑的」な評価をしている。私もこれを見たが，特別の感情は抱かなかった。スペインの市民戦争にまだ無関心だったからであろう。

ここで話は一変し，アリカンテの祭りの話となる。アリカンテはリスボンへ行くまえに著者たちが野宿した場所である。時期は不詳だが，その祭りには，巨大な風俗人形がいくつも飾られており，それがアメリカ帝国主義の経済的進出と退廃的な文化を揶揄したものだったことに著者は共感の意を示している。私はバレンシアの火祭りで巨大な人形を見たが，そうした反米的な，もっと言えば思想的な意味をもつ人形には出会わなかった。

このルートの途中で著者たちは，グラナダに寄りロマ（ジプシー）のフラメンコを見学したのち，自動車事故に遇うが，それを部落の人々が出てきて助けてくれたと感謝の意を込めて記している。ここでもアルハンブラ宮殿に言及すべきだった。

さらにマラガでは，「ラ・マラゲーニァ」に触れ，今は歓楽地になっているが，市民戦争当時，フランコ軍が闘牛場で市民たちを獣のように大量虐殺したと，著者は記している。それをピカソは嘆いているのではないかとし，著者はそれを理由に（?），マラガではホテルを取らず，セビリアに向かったとしている。なお，著者は，ここでチリの詩人パブロ・ネルーダの「野獣の爪痕」というマラガでの虐殺の詩（羽出庭梟訳）を紹介している。

ここで著者は「日本精神史の落丁」という小見出しのもとに，1936年当時，日本からは誰も国際義勇軍に参加しなかったと憤慨している。もとよりリンカーン旅団やジョージ白井のことは出てこない。その年は，日本では2・26事件が起こり，右傾化の方向を辿った時代だったから，著者が憤慨するのも無理はない。著者によれば，国際的にはロマン・ローラン，アンドレ・マルローやジイドの呼びかけに，ナチス・ドイツからは5千人の義勇兵が参加したのに，日本の知識人は誰一人として応じなかったと嘆く。（36ページ参照）つまり著者は日本の知識人について，プロレタリアート運動に対する国際的連帯心の欠如を問題にしているのだ。なお1936年は私の生まれた年である。その年齢で参加するのは無理だ。だが今の2022年でも，老齢化し，参加するのは無理だ。では青年時代ではどうかと問われれば，やはり「無理だ」と答えるであろう。

戦争で死ぬのは嫌だ。ただし1944年当時だと，少年ながら日本軍人として出征し，死ぬ覚悟は出来ていたと思う。なにしろ「鬼畜英米」「撃ちてし止まん」という軍国主義教育の盛んな時代だったからである。「日本精神史の落丁」にはそうした時代背景がある。

著者は嗟嘆する。この国際義勇兵の善意が，スターリン主義の党派によって，トロッキストやアナーキストが粛清され，国際旅団は解体，スペイン共和国は見殺しにされたが，その時に欧米が体験した深刻な思想的衝撃を日本人の精神史が共有できなかったと著者は憤るのである。だが，当時の日本でそのような事実が報道されたかどうか。報道管制されている時代に，思想的共有ができなかったのは当然ではなかったか。

そこで著者が「朝鮮戦争がはじまり，スターリンが死に，スターリン批判が紹介され，日共が分裂し，バンガリー暴動がおき，1960年安保闘争が経験されて，はじめて精神史上の『日本の夜と霧』がだれの眼にも明らかに見えるようになった」（38ページ）と述べるのである。

さらに著者は「アウシュヴィッツはゲルニカに初演されていた。ハンガリー事件やチェコ事件は，その原型をすでにスペイン戦争にあらわしていた。ヒューマニズムと国際主義はこの戦争中に理想化の頂点に達し，突然まっさかさまに転落した」（38ページ．一部省略）「純潔を失ったプロ

レタリア国際主義，日本の精神史に欠落した落丁部分を訪ねる巡礼の旅と重なった」（同）と追記するのである。

著者の発言は，2022年の今からみると，必ずしも全てを同意できない。安保闘争以後のことを思い出すと，日本赤軍事件を契機として，極左的冒険主義の盲動，専制的社会主義体制の崩壊，それからアルカイダなどの無差別テロ，さらにはロシアのウクライナ侵攻をめぐる大国間の策動などを知ることによって，日本国民はもっと賢くなったのではあるまいか。だからと言って，現代の日本人は何をすべきか，残念ながら，その点は明確ではない。著者のような「過去の思想」への巡礼の旅がいつまで続くのか，それも判らない。

さて，著者たちはアンダルシアからポルトガルに入り，それを抜けると，再びスペインへ戻ってくる。サラマンカのドゥエロ河（?）畔で，スペインの人々は楽しい夕暮れを過ごしていた。それを見て，著者はスペイン人の生活の豊かさを感じる。

ここで著者が言及しているのは，1936年にサラマンカ大学へ侵入してきた「反乱軍」を指さして，学長が講堂で批判し，結果として監禁され，のち死亡したということである。

そのサラマンカより約百キロ離れたアヴィラの古城を見学し，セゴビアへ約50キロという山地の宿でのもてなしが良く，設備は清潔で，料金は安く，至極親切だったと記している。ここでは自らの調査団を「どさ廻り隊」と名付け，地域住民との交流を深め，「お互いに温かい感情の流れと小さな友情の花がいくつも咲いていった」（40～41ページ）と記している。これは羨ましいことである。個人旅行では，危険なので，これが出来ない。

また話は変わり，「日本人義勇兵の死」という小見出しになる。ここブルネテでは，独ソの戦車戦があり，ここはヘミングウェイの『誰が為に鐘は鳴る』のゲリラ戦の跡地であり，詩人ロルカなど多くの文人が戦死したと説明し，さらにジャック・白井が1937年に死んだという話がある。石井綾子氏によれば，ジャック・白井はニューヨークの労働組合でストを組織したらしい。彼の死を日本の領事館は「売国奴」と罵ったらしいが，組合のひとたちは追悼会を開いたという。ここには著者のジャック・白井に対する敬意がみられる。

著者たちのスペイン最後の訪問地は，牧歌的な田園のゲルニカである。その途中でアルタミラの洞窟にも寄っている。著者はゲルニカをピカソによる「現代のアウシュヴィッツの予告」だとしている。つまりピカソはゲルニカという「芸術によって人類に警告した」（44ページ）と著者は述べ，アントニオ・マチャードがエレンブルグに宛てた手紙の一節（『芸術家の運命』に所載）を引用し，紹介している。そして「どさ廻り隊」はピレネーを越えている。

スペインでは著者たちの「思索」を多く紹介しすぎたかもしれない。だが，労働者階級の国際的な連帯や人類愛についての思索，そして著者の思想傾向を明らかにすることができた。内容はスペイン市民戦争が中心であることも，この箇所は本書でもっとも優れた部分と言ってよい。スペインの旅で，首都マドリッドをはじめアルハンブラの宮殿やバルセロナのガウディについて多く触れていないのも本書の特色である。けだし，「思索行」だからであろう。なお，著者たちのルートから外れるが，「巡礼」という言葉が出てくるからには「サンチアゴ・デ・コンポステラ」の聖地に触れて欲しかった。

④「閑雅な田園・豊かな底辺」（フランス・北欧）

著者たちの旅は，スイス・アルプスからモン・ブラン山麓の道をグルノーブルへと辿り，南仏のアビニヨンへ到達する。

アビニヨンは「古い歴史をもち，城壁を八分どおり残している大城塞都市」（47ページ）だとし，その外壁を巡って領主権力の盛大さを知ったとある。また法王宮の大殿堂は「簡勁さと雄渾さ」（同）をもった「たたかう城」（同）だとしている。著者はどうやら「法王の幽囚」を「虜囚」とは見なしていないようだ。また「アビニヨンの橋」についても，歌のように「牧歌的なものではな（い）」としている。

私はアビニヨンの橋を列車の窓から数度眺めている。だが，ここで下車したことはない。もっとも，途中で断絶している橋については「侘しい」という印象をもち，あの橋はなぜ途中で断絶したままで放置しているのだろうと疑問をもったことはある。

それより著者たちはアルルへ行き，ここではアルルを次のように賛美している。「その光彩のまばゆさ，強い色調。黒い糸杉，浅黄色のポプラの若樹，金色に熟れた小麦の穂波，明るい農家，…」（同）。だが同時に，著者は「この南フランスにも都市化の波がおしよせ」（48ページ）ていると嘆いている。

アルルの鉄道駅を私は何度も通っているが，下車したことはない。明るい平坦地，それからヒマワリ，絵画の印象派などを想起することはあっても，全体としては荒涼とした原野であったという印象しかもっていない。未開発地という思い込みがあったからだろう。

著者たちはマルセーユへ行くが，それより先はコート・ダジュール方面，すなわちカンヌやニースへは行かず，なぜか，それより引き返してツールズからミジ運河沿いにカルカソンヌの城塞都市を訪れている。これでは中東へ行くのには逆方向となる。

そのカルカソンヌの町について，著者は，ここは現在，観光地化されているが，過去は「恐ろしい魔女狩りの舞台だった」（同）と述べ，さらに，こんな不自由で閉塞社会からどうして市民社会や議会制が生まれるのかと，その歴史的経緯に疑念を抱いている。

私は，カルカソンヌが「魔女の町だった」とか，市民社会や議会制が生まれた場所だったということを知らない。だから私は著者とは反対に，窮屈な場所だっただけに，自由や民主主義といった運動も起こりえたのではないかと思う。いずれにせよ，短絡的発想だ。 著者たちは，ボルドーより北部に位置するバイヨンヌ，リブヌール，アングレーム，それからシャルトルなどの都市を訪れている。そこで著者たちが感じたのは，「豊かなるフランス」である。農村にある教会の尖塔などが素朴で美しいと記している。

私は，この地方を列車で二度ほど通ったが，上記の都市名は記憶にない。しかも，この地方が「豊か」とは感じなかった。むしろ，崩れた土崖を掘り抜いて居住にしている箇所などを見ると，ここフランス西南地方の農民たちも貧しさの中で懸命に生きているのだなぁと感じたことを覚えている。ただし現象としての風景は緑豊かな農村地帯であった。

私がブールジュという小農村で宿をとったとき，その宿の脇に小川が流れ，そこを柳の葉が揺れるという自然に触れて，その田舎的風景に心の底まで浸ってしまった。そんな一齣が思い出として残っている。素朴さに恵まれている自然的景観という意味では，フランスの西南部の農村は確かに豊かそうに見える。

これより著者たちはパリに寄り，のちロアーヌ河に沿ってショーモント，シュノンソー，シャンボールなどの中世の城を巡り車で走る。有名な観光コースである。著者は入場料が高いと嘯く。だが，風景は楽しめると言う。河口に近いナントの町に入っても，それを「わびしい都会」（55ページ）と評し，あわせて著者は，日本の自然美が失われたことを嘆いてみせる。どうやら色川氏は，自然讃美主義者のようだ。

さらに著者たちは国道10号で，交通事故の現場に遭遇し，そこで「女性の片足」を目撃する。狭い田舎道でも，フランス人は猛烈なスピードで車を走らすと述べ，文豪カミュが交通事故で死んだのもこの道ではなかったかと文学史的知識を披露する。

その後，著者たちはブルターニュを経由して，ベルギーへ向かう。それでいて，モンサンミッシェルについては何の言及もない。「どさ廻り隊」は奇妙な旅をするものである。

のち著者たちは，「ベルギーとオランダ」へと向かうのであるが，途中でワーテルローへ寄っている。著者たちは，そこを「愉快な一大観光地」（56ページ）と揶揄している。何故かと言えば，ベルギー人たちは「ナポレオン」を観光資源として利用し，彼を征服しているからだ。なるほどと思う。

著者たちは，ブリュッセルからアントワープ，アムステルダムへと旅を続ける。オランダについては，「農業はゆたかで過密感がない」（57ページ）と述べ，途中では「風車のある農家や方形の水路によって区切られた広い牧場を見る」（同）と褒めている。

簡単な描写だが，オランダの農村地域の風情をうまく表現していると思う。続いて，著者たちは陶器の町であり水の都であるデルフトを訪れている。私は，この町や「デルフト焼」のことを知らない。それにしても，なぜロッテルダムに寄らないのか，著者たちの旅は何とも不思議である。港湾や美術館にあまり興味がないのかもしれない。

著者たちは，ゾイゼル海の大干拓，それからルノアールやレンブラントの絵画についても沈黙している。「思索行」であれば，これらについて一考すべきであったと思う。

この「どさ廻り隊」は，ブレーメンやハンブルグなどの自由都市群をまわってコペンハーゲンにやってくる。ここではハンザ同盟について何らかの「思索」があってしかるべきだと思う。たとえば中世の封建的なギルドやツンフトに縛られたハンザの都市を「自由都市」と呼び，「都市には自由がある」とするのは正しいかという問題がある筈である。

デンマークのコペンでは「性革命」について論じている。つまり，コペンでは，売られているのは，「徹底的に露骨な性行為の写真集やフィルムばかりで，性の『革命』とか『開放』にともなうはずの人間性の喜びや美しさはほとんど見出しがたい」と嘆き，それは「国家権力によって公認され，資本主義の『商品』として売り出されている」（59ページ）と看破したのちは，「このあまりに即物的，生理的なポルノ文化はドギツすぎて逆効果である」（同）と批判している。私がコペンの商店街を歩いて感じたことは，まさに著者が言った通りであり，著者の見解に同感である。

私が見学したのは，岩上の「人魚像」をはじめ，ビール工場，チボリ公園の射的，コマの博物館である。それからコペンから離れた町ではバイキングシップ（ロスキレ）や古城を見学したが，それらについて著者は触れず，戦争博物館と野外民家博物館の見学に留めている。

なにしろ，先を急ぐ旅だからであろうか。ヘルシングボリに上陸したのちは，スウェーデンの

自然を楽しんでいる。草原を抜けて，森と湖の地帯では「清流がながれ，白樺林のあいだの牧場に牛」(60ページ）という描写をしている。私の場合には，フインランドも含めて，この地方の風景はそんなようなものだったと，実感として，それを思い出す。

著者たちは，スウェーデンから北上し，オスロへ到着する。さらにヨーロッパ最大の大陸氷河ヨーステダルスプレに向かう。そこでの氷河やフヨールドを見学して感激した模様が描かれている。ここで見たフヨールドはおそらくソグネフョールドであろう。

著者たちは，さらに北上したらしいが，文章では，どこまで北上したのか，その点が曖昧である。添付されている地図によれば，北緯62度あたりまでで，そこは道路で北上できる限界だと述べている。

私が行ったのは，著者たちよりも10年後であるが，その時には，キルケネス（北緯70度）まで道路で行くことができた。もとより経路も違っているので，安易な判断はできないが，その後にノルウェーでもモータリゼーションが進展し，道路建設が急速に進んだのであろう。もっとも白夜のナルビク（北緯68度）では，一晩中，暴走族に悩まされた。

著者たちが氷河やフヨールドを見て感激したのも無理はない。だが，ここまで来たのなら，ヨーロッパの最北端であるノール・カップ（ノース・ケイプ，北緯71度）まで行くべきだったと思う。もっとも，著者たちの，それから先の旅を考えると，そここで引き返したことを非難することはできない。北欧の月を仰ぎ，その月を愛で，宇宙へおもい馳せたことは，著者たちにとって良い思い出になったことと思う。

⑤「ロマンチック街道をゆく」（ドイツ・オーストリア）

著者たちは，ハンザ自由都市群を廻ったのち，ビュルツブルグからロマンチック街道を走っている。ちなみに私がロマンチック街道をバスで踏破したのは1995年だったから，著者たちの旅から30年後ということになる。

さて，著者たちが最初に感じたことは，ドイツの森の素晴らしさである。彼らはその素晴らしさを賛美しつつ，日本の森の荒廃ぶりに嘆息している。そして「ドイツ人の森への愛は，資本主義の私権の枠をこえている」(68ページ）とまで言っている。

ローテンブルクまでの農村風景や雰囲気に魅せられながら，著者は「いまの日本の極端な『工業立国，貿易立国』の道は，荒廃への道である」(71ページ）と言う。確かに，著者の言うような問題はある。諸資源に乏しい国としては，外国からの輸入資源に頼らざるをえないし，その加工品を海外に輸出しなければならない。だから著者は「極端な」と注記しているのだろう。問題は，この「極端な」という意味である。製品（例えば自動車）を輸出するために「円安」を基調とする為替相場では，原料（鉄鉱石，原油，L. P. G 等）を輸入する場合には不利だ。日本の場合は円高のほうが貿易収支では有利ではないか。

「工業立国，貿易立国」という国家政策を遂行するにあたって，「円安」基調でもって，これを推進するというのは，保有するドルの差額益を取得できるにしても，それはまさしく「極端な」事例ではあるまいか。なお，著者は，貿易問題よりも，林業の育成と住みやすい住環境の整備を「思索」し，主張しているのだろうと思う。

次に著者は「観光とは何なのか」と題して，「ローテンブルクとディンケルスビュールは四面

を城壁でかこんだすばらしい町だった」（同）と褒めている。そして「日本にはもうこういう歴史的な町はひとつもないであろう。物欲と伝統保存が矛盾すれば，まず物欲を選ぶ国だから」（同）と述べている。

確かに，中国では南京，大同，武威，フフホトなどで「観光化」に対応した明清調の街路を再建しているし，日本でも白壁の倉（倉敷）や黒壁の民家（伊達）あるいは古城の天守閣を再建し，保存している。こうした動向と対比させながら，著者は「ヒロシマの中心部をそっくりそのまま残さなかったことは，日本にとっても，人類にとってもかけがえのない損失だった」（72ページ）と残念がっている。

この点は，私も同感である。北九州市でも，門司区の古城山旧要塞地区，若松の石炭積出港の風情，戸畑区の沖台中小工業密集地区など，何故に「観光資源」として温存しなかったのか，不思議である。もっとも，長崎の軍艦島や八幡製鉄所の一部が産業遺産として残されているのは，それなりに評価されてよかろう。

著者は「大和」や「飛鳥路」の保存を望むと同時に，「Discover Japan」に対して，「国民の歴史意識をますます風化させ云々」（73ページ）と国鉄モダニズムを批判している。

さらに著者は「観光とは」と題して，かっての激戦地であったグァム島や沖縄の各地を「新婚さんのメッカ」や「夢のマリーンランド」に変えようとする「資本の外裳」（同）なのかと揶揄している。そして「日本は今世紀に歴史遺産と自然を破壊しつくし，二十一世紀にまた自然を造り直すムダ骨を折ることになろうが，そのときではもう遅い」（同）と無力感に陥っている。だが，観光資本による歴史遺産や自然破壊を論ずるだけでは，「観光とは何か」という問いに答えたことにはならない。確かに観光資本による歴史遺産や自然破壊が行われたことは，少なくとも日本の場合には否定できない事実である。

もともと「観光」とは，自然や歴史的遺産などの「国の光」を鑑賞することであって，「破壊」することとは逆のことなのである。「破壊」という一面だけを強調して，それを概念の規定要因とすることはできない。ただし，著者はドイツの歴史的遺産や自然保護の実態を踏まえて，日本の「観光」を批判しているのであって，「観光」という範疇の概念規定をしているのではない。そのように判読すれば，むしろ著者の感受性を高く評価しても良いのではあるまいか。

ローテンブルグは確かに歴史遺産を大切にしている。とくに町を取り巻く城壁を観光客は回廊として歩くことができるし，庁舎の鐘にまつわる伝承，鉄火面などがある処刑場，クリスマス用品専売店，伝統的手芸品の販売店，赤茶けた民家の屋根などは，周辺の農作地帯や森林地帯から隔絶した「夢」の世界となっている。このことについては，拙著『ヨーロッパ浪漫紀行』（文理閣）を参照されたい。

続いて，著者は，フュッセン近くのシュバンガウ城とノイ・シュバンシュタイン城の紹介，あわせて森鴎外に関連する文章を掲載している。ここで著者は「ひとりの帝王の華麗な倦怠と自己疎外の渇きをいやすために，バイエルンの人民十数万人が，この急峻な山腹にぜいたくな城をきずくという大工事の犠牲になった」（75ページ）と記している。

上記のことは間違いではない。だが，ここまで来て，「新白鳥城」の美しさに感嘆するよりも，こうした醜い歴史的事実を述べることが，かえって「人間感情」を疎外することにならないか，それを私は危惧する。城から眺めた森と湖の景観の素晴らしさは，中世における人民の苦しみを

忘却させてしまうほどだ。また高所恐怖症なのに，高い吊り橋から眺める白い古城の美しさは，これを称賛こそすれ，「人民の苦痛」をここでは忘れさせてしまうほどだ。歴史的事実の醜悪さと現在の美的景観，両者が同時に存在することもありうるだろう。

これ以降，著者たちはチロルの谷（エッタール）を訪れ，インスブルックやザルツブルクを経て，ウィーンに入っている。これら途中の訪問地について，さらにはザルツカンマーグートなども含めて，著者はもう少し，論述してもよかったのではないかと思う。

ウィーンの最後に，著者はスタイン邸を訪問している。そこは，かって伊藤博文が明治憲法を起草するために立ち寄った邸宅で，のちに有栖川宮熾仁，黒田清隆，陸奥宗光などもスタイン邸を訪れたらしい。その邸宅には伊藤博文が座った椅子などが残っていたと紹介している。私はこのスタインを知らないし，ウィーンの邸宅も知らない。また明治憲法も読んだことがない。著者の博識と歴史的興味が発露している箇所である。

私が寄ったのは，ウィーン大学の日本学科（ヤーパノロギー）のマルチン・金子講師であった。彼は『日本の本近代化』（東大出版）に掲載されている私の論文「第一次大戦後における鉄道政策の展開」を示し，「貴方の名前は知っている」と笑顔を見せた。そして，ウィーン大学のあちこちを案内し，見学させてくれた。なにしろ，ここは経済学ウィーン学派の本拠地なのだ。

その他に，ウィーンで出会ったのは星野康子さんである。星野さんは，ブラチスラバ（チェコスロバキア）に留学していた桑原文子さんが紹介してくれた声楽家である。彼女が「ウィーンの森」を案内してくれたので，この時は，大いに助かった。

ウィーンについては，宮殿や博物館をはじめ見学する場所が多くあるのに，何故か著者は，このスタイン邸のことしか言及していない。「思索行」という以上は，ウィーンに関連するヨハン・シュトラウスやフランツ・シューベルトなどの音楽，それから観光名所の一つ位，例えば大観覧車などを見学して，映画「第三の男」の感想でも述べて欲しかった。

⑥「バルカン三国のかげり」（ユーゴスラビア・ギリシア・ブルガリア）

ウィーンから中東方面に向かうとなれば，トルコを経由するのが通常のルートである。だから著者たちはトルコへの最短距離をとって，南方向のユーゴスラビアへと向かったのであろう。だが，ウィーンからチェコスロバキア，ハンガリーを経由する，かってのオリエンタル急行が走ったルートをとらなかったのは何故か。もしかして，その当時，チェコやルーマニアからトルコへのルートをとる場合には，これらの国へのビザ取得が困難だったのかもしれない。私が旅した時とは，時代が違うのである。

著者たちは，ウィーンから西南下し，グラーツからクラーゲンフルトまでの途中でドナウ川を渡り，ドラボグラード（ユーゴ）からスロベニア（ユーゴスラビア）の首都（リュブリャナ）へ入っている。

ドラボグラードで著者たちが感じたのは「民の目つきが鋭い」ということであった。そして，スターリンから『共産主義の落第生』と言われた「（チトーの）ユーゴスラビア」に入り，「ここはもうヨーロッパではない」としつつ，ユーゴの小さな町で見た河川汚染を問題にしている。その小さな町にあった工場「から排水がどしどし流され，山間の渓流を汚濁している。白い泡がどこまでも続き，臭気さえ発している」（85ページ）「渓谷全体が汚染されている」（同）と記してい

る。それだけではない。著者は次のような問題を提起している。

その問題提起とは「人民の福祉と保健とを最優先にする（のが）社会主義の国ではなかったか」（同）というものである。この問題提起に対しては，まずもって「社会主義とは何か？」という別の問題がある。だが，少なくとも1970年代初頭であれば，建設途上の社会主義諸国では「人民の福祉と保健」という点からみて不十分な箇所は多々あったろうと思われる。

私の見聞でも，1981年代のハレ（東ドイツ）付近では化学工場からの廃液が垂れ流しであり，「これを解決できないのが現在ドイツの現実だ」という説明を受けた。また，同年にアゼルバイジャンのバクーでは，カスピ海の海面は油汚染で，また採油現場では家庭ゴミの堆積で，いわゆる「公害」問題は酷かった。［拙著『バイカル号は夢をのせて』（窓映社）及び拙著『懐かしのウンター・デン・リンデン』（窓映社）を参照のこと］

また「白い泡がどこまでも続き」という珍しい汚染現象については，年代も社会体制も異なるが，ヨーロッパ最大の滝「ラインの滝」（シャフハウゼン，ライン川の最上流）付近で見たことがある。（拙著『ヨーロッパ浪漫紀行』（文理閣）を参照のこと）。

確かに社会主義国でも「公害」現象はあちこちで見られた。だからと言って，社会主義そのものまでも否定してしまうような著者の「思索」については，これを「直観」としては納得できるが，それを「結論」とする発想についてはなお疑問視せざるをえない。それは著者自身も承知していることであった。

著者による次の文章はやや長くなるが，いわゆる「思索」としては見事なので，遠慮なく引用しておく。

「私たちの眼は社会主義にたいして全く観念的で，現実の複雑さを少しも見ていない。ソ連，中国以外の社会主義は東欧共産圏として一括してしまい，いま，そこで，どのように多様な社会主義社会実現の実験が，暗中模索されているかという重要な事態にたいして，私たちは知ろうする関心さえ失っていた。だからハンガリー暴動やチェコ事件が起こると，その否定面だけに非難が集中して，結果は社会主義一般への絶望感だけが強調され，蓄えられるという結果になってきた」（86ページ）

この文章は1976年に発表されたもので，その後はスターリン批判，天安門事件，ベルリンの壁の崩壊，東欧社会主義の瓦解，そして2022年の現時点では，ロシアによるウクライナへの侵攻など，世界は大きく変転した。著者たちによる社会主義への期待はさらに絶望的になりつつある。ここでも「社会主義」とは何であり，20世紀の社会主義とはいかなる社会体制であったのかということが鋭く問われている。

著者たちはリュブリャナより海岸の町リエカに到る。ここで明るい地中海の「青」を満喫する。ここでは原色重視のアドリア海域の風景と日本の「陰影礼讃」的風景との違いについて，つまり風土の違いについて述べている。自然的風景を単なる色彩感覚として比較すれば，著者のような風土の差異として把握することも可能である。だが，その風土に育まれた歴史の重さをそれに付け加えねばならない。さらに政治・経済などを付け加えるとなれば，これはもう蛇足というものであろう。

著者たちは，このアドリア海の沿岸にそって南西方向へ移動する。そこでも「ユーゴ政府が外資獲得を期待している観光，保養地として，多くのホテルや民宿などが建ちならんでいた」（88

ページ）とし，「社会主義国にはそれらしい観光政策があってもよいはず」（同）という感想をもらしている。

著者がそのように思うのも無理はない。事実，1980年代になっても，社会主義諸国での物質的生産力の低迷，とりわけ生活物資の不足は続いていた。軍事力の増強，生産手段偏重の生産力増強といった状況のもとでは，とても自力による観光開発政策を展開する余裕は無かったのである。第二次大戦の影響も大きかったし，東西対立による自由貿易の相対的杜絶はこうした旧社会主義諸国を困窮から脱出させるまでには至らなかったのである。

ソ連を含む社会主義諸国では，動物園，植物園，博物館，美術館などは比較的整備されていたと思うが，庶民の生活の一環としての観光までには手が及ばなかったのである。

どう間違えたか，著者たちはアドリア海沿岸ではなく山中に迷い込み，そこで民俗的差異を味わうとともに民族問題を社会主義はどう解決していくのかという問題を提起している。だが，それについては，保留にしたまま著者たちはサラエボに到着している。

著者はこのサラエボを「ミナレット（尖塔）のような細長い塔がやたら立ち，異様な雰囲気をかもしだしている。つまり，この町にはキリスト教と回教と共産主義とが同居しているのだ」（92ページ）と述べている。

私は，1981年，この町に一日しか滞在していないが，確かにそんな雰囲気があった。この地で著者は「美人が多いこと」と「プタイナー橋がプリンツィポプ橋という名に変わったこと」を記している。前者はともかくとして，後者については「サラエボは第一次大戦の切掛を作った事件で有名」と「プリンシポフの橋を渡って回教寺院（モスク）の方へ向かう」（拙著『ドナウを越えてバルカンへ』・窓映舎）と私は記しているだけである。つまり，この橋でオーストリーの皇太子が襲撃されたのだが，私はその場所を確認することをしなかった。だが，著者も，そうしたテロがもつ社会的意味について論じてはいない。このサラエボで著者は，「郊外に十階建ての高層住宅が何十棟となく目下建設」（93ページ）と記して，新しい息吹を著者は感じたようだ。これより著者たちはベオグラードへと向かう。

ベオグラードについて著者は「都心部は垢抜けした商店街やオフィスが並び，建設の槌音と共に活気がみなぎ（り），共産主義を感じさせない」（94ページ）と評している。もし，著者たちが「ネオ・ベオグラード」を訪れていたら，居住地区複合体を見学し，おそらくそこに社会主義建設の前進をより強く感じたのではないかと思う。（拙著『ドナウを越えてバルカンへ』，窓映舎）

著者たちはベオグラードから南下し，アルバニアのスコピエへと車を走らせている。ベオグラードからだとブルガリアのソフィアを経由するのがイスタンブールへの近道であり，かってのオリエント急行が走っていたルートなので，そうするかと思ったが，おそらく著者たちは昔のマケドニアを見学したかったのであろう。

私の場合は，ソ連とは異質の社会主義を走りはじめたアルバニアに行ってみたがったが，ビザを申請しなかった。それは中ソ対立という国際的状況の中で，アルバニアが親中国路線をとっていたからであり，そのためソ連のビザを取得するためには断念せざるを得なかったのである。だから，アルバニアについては未踏である。

ところで著者たちは，スコピエが8年前の大地震で壊滅したが，その時は高層ビルを都心や郊外で続々と建設中であったと感心している。だが，テッサロニキに関する叙述はなく，ギリシア

への国境を越えている。

著者はギリシアについて次のような感情を抱いている。「古代文化の遺骸を喰い物にして，観光収入で無気力に生きる人間の多い国を好まない。古代ギリシアの文化にたいしても，それが奴隷制の上に立っていたものという説明が，どの案内書にも一行もないことが不満である」（95～96ページ）

著者のような感情が，私には別の形である。それはアテネ市街地の中心で集団強盗にやられたからである。その時は，金銭よりも精神的に大きな打撃を受けた。（拙著『オリンホスの神々が笑う』・文理閣）それでも，デルフィやオリンピアの古代遺跡には深い感銘を受けた。

著者たちは，パルナッソス山の麓のデルフィに来ている。そこで著者は「山岳重々たるあたりの景観」（98ページ）を，そして，のちに「スニオン岬とポセイドンの神殿の廃墟」（同），「コリントスの廃墟」（同）を月明りの下で眺めている。またアクロポリス（アテネ）の丘の下にあるタベルナ（食堂）で乾杯し，友人の歓送会を開いている。

この間における著者の「思索」としては，「十二・三歳のころ…ある少女のノーブルな美しさに打ちのめされて以来，…充たされない深い欲求があった」（99ページ），そして「何十年も潜在意識の底に生きつづけて」（同）きたのだが，「旅は私自身の内面の空洞への開眼にもなった」（同）というものであった。著者はそうした少女に北欧で会い，コリントでも会っている。

著者たちは，ギリシアからブルガリアへ向かう。ギリシアのセレという国境に近い町には兵士が一杯だったらしいが，セレはテッサロニキの北東に位置している。こうしてみると，やはり著者たちは遠回りして，ブルガリアのソフィアに向かっていたのだ。

一行は，ブルガリアへの国境を越えると，社会主義の「優等生の国」という穏やかな雰囲気を感じ取る。しかしながら，「沿道のいたるところ共産党好みのスローガン，赤旗，党幹部の肖像写真，ポスターの氾濫なのである」（102ページ）「共産党の宣伝のしかたというのは，どうしてこうも世界中がよく似るものかと不思議である」（同）という印象を伝えている。

そうか，そうかと私も思う。私はこれまでに，ベトナム，中国，モンゴル，ソ連，東独，東欧など，多くの「社会主義国」を巡ってきたが，それぞれの国で同じことを感じていた。しかも二桁に達する旅行記を書物として刊行しているにも係わらず，このことに触れていない。共産党幹部の肖像写真の執拗なまでの掲示は，それなりに理由があるのだろうが，私個人としては，イデオロギーの浸透よりも，むしろ「個人崇拝」という政治的悪影響を及ぼすのではないかと感じていた。それを著者が問題にしたのは，実に勇気ある発言だと思う。流石に「思索行」である。

著者たちは，首都ソフィアに「画一性と集中性」を感じながら，黒海沿岸のバルナ（ヴァルナ）へと向かう。その途中，著者は「道標がしっかりしている」「国営のギャンプ場が160箇所もある」（103ページ）と評し，この国の「観光国振り」を称賛しているようである。どうやら著者は過去に，バルナに来たことがあるらしい。

だが，今回の訪問でバルナを見て，驚嘆している。著者はバルナの景観を次のように紹介している。「おびただしい高層ビルと光り輝くショーウィンドーや照明をもつ壮麗な欧米風近代都市」（104ページ）「高級車の氾濫，スマートな四車線のハイウェー，林立するモダンなビル群，…西欧風なイルミネーションや瀟洒なショッピングセンター，娯楽施設など」（105ページ）

残念ながら，私はバルナという都市の景観を紹介できない。ルーマニア国境から夜にバルナへ

到着して，安宿に泊まったが，その時の印象が朧げであり，しかも翌朝にはブルガスへ向けて旅立ったからである。バルナの市街地図を購入しているから，「大都会」であったという印象が蘇り，やがて説明できるようになるかもしれない。

バルナからブルガスまでは128キロ。著者たちは車でブルガスを通過し，トルコの国境を目指している。だから，ブルガスという町については，「この町並は薄汚れてはいるが活気のある産業都市で，港や町は労働者や学生が溢れている」（106ページ）とあるだけで，いかにも素っ気ない。これより著者たちは南下して，トルコ国境へ向かっている。

⑦「アジアの風塵の中へ」（トルコ）

著者たちは，トルコ領に入ると，キルクラエリ（クルクラレリ），バルバエスキー（ババエスキ）を経由している。ここでキルクラエリと呼んでいる町はKiで始まるが，トルコ語のKiはキではなくクである。これを知らない人が，有名なトプカプ（Topkapi）宮殿をトプカピと誤読するのはある程度止むを得ない。

それはともかくトルコ人が日本人に対してもつ関心は，ユーゴやブルガリアの人達のそれの「10倍」と著者たちは記している。「10倍」というのは別としても，同様のことを私も感じた。それほどにトルコの人々は親日的である。その理由は，大国ロシアに戦争で勝ったこと，串本沖で沈没したトルコ軍艦に対して地域住民が献身的に救助活動を行ったこと，それに加えて，日本製工業製品の大幅な進出ということの三つであろうか。

著者の記述によれば，イスタンブールでは，北欧ヨーロッパに滞在していたヒッピー族が南下して，イスタンブールのブルーモスク周辺に集まっているということ，そしてもう一つは一人のトルコ青年が日本への留学を願望しているという話が出てくる。これに対してイスタンブールの名所・旧跡などの話が全く出てこない。これは驚くべきことである。

せめてオスマンによるイスタンブール攻防戦，アヤ・ソフィア大聖堂，ブルー・モスク，ガラタ橋，ボスポロス海峡大橋などには触れて欲しかった。

著者たちは，すぐにトルコの内陸部へと向かう。そこで箱庭的ヨーロッパの景観に対して，アジア的な自然を著者たちは感じたようだ。

著者たちは，エスキシェヒルを過ぎ，首都アンカラも通過する。アタチュルクのことについて触れないのは，「トルコ近代化の父」を無視したことになる。せめてアタチュルク廟にでも参拝し，敬意をはらうべきではなかったかと思う。

その替わりに著者たちは，「フィリギア人の遺跡ゴルディオン」（117ページ）を訪ねている。だが，私はその遺跡のことを知らない。ただ，「ゴルディオン」というのは，アレキサンダー大王がここを通過したときに一人の老婆が出てきて，「この結び目を解いたらアジアへの道が開けるであろう」という難題を出したところ，大王は剣でもって，その結び目を両断したという逸話を聞いたことがある。その結び目は「ゴルディオンの結び目」と呼ばれ，それを断ち切ることは難題を解決するという譬えとされている。

著者たちは，その後，アンカラより東のボガズケイ（キョイ）と2キロ離れたヤズリカヤを訪れている。私は，この二つがヒッタイトの遺跡とは知っていたが，現地を訪れておらず，ここでは著者たちの記述を大切にしておきたい。案内者が豹変して，著者たちを恐喝することになった

という話については割愛する。

さらに著者たちは，ヤズリカヤからサムソンへと向かう。サムソンは黒海に面した港湾都市である。さらにサムスンからトラブゾンまで黒海沿岸を走る。

実を言うと，この黒海沿いのルートを私も走りかったのである。若き日の私が夢見たルートは，トラブゾンからは内陸部に入り，エルズルムに到る。そのエルズルムからはカラキョセを経由して，アララット山（5165 m）の東麓に到る。条件が良ければ山頂へ登る。それよりワン湖を眺めて西行し，エラーズやマラトヤを経由して南下し，アダナからセバン川畔のイッススへ抜けたかったのである。つまり，ノアの方舟伝説，それからダリウス大王とアレキサンダーとが戦った古戦場（イッススの戦い）の両方を見学したかったのである。

だが，私の場合には，ワン湖周辺の治安が悪いということと，いかに世界一周とはいえ限られた日程の中では，時間的余裕が無かったために，このルートをとれず，結局アンカラからはカイセリー（カパドキア）経由でアダナへ至り，イッススの古戦場を見学してからはシリフケ，コンヤ，アンタリアなどのトルコ南部の古都や織物業（絨毯）を見学することにしたのである。（拙著『イスタンブールはガラタ橋』・文理閣）

著者たちの「思索行」へ戻ろう。サムスンからトラブゾンまでのルートを走って，著者は「家が貧しく，服装が貧しく，農業が貧しく，態度が貧しいのである。……やたらに難民テントのようなジプシーの群落のあるのが目につく」（121～122ページ）と述べ，トラブゾンの町については，「ギリシア時代からある古い町だ。たしかに黒海の要衝であり，すぐうしろに急峻な大山脈をもっている。町並みは横にのび，丘には古代の遺跡がある。人口８，９万人」（124ページ）と紹介している。貧困と遺跡が交差する黒海南岸地域に関する貴重な旅の記録である。

さて著者たちはトラブゾンからエルズルムまでの324キロまではアジア・ハイウェイを走るが，この間は山道で狭く，時速20キロ程度というから驚く。沿道の山村はこれまでよりも貧しく，夜間に電灯の灯る民家は僅かでしかないと記している。沿道にはギュミュシャーンという町があるのだが，この町を過ぎたあたりから「女たちの覆面がふえ，男たちの顔つきにきびしさがます。クルド族かもしれない」（126ページ）という変化に注意を払っている。さらにバイブルトという町では「着剣の軍隊と兵営を見た」（同）としている。なお，この町を通過すると，高度2500 m の山道にさしかかる。それより「大きなタテ縞模様の布を体全体にかぶった女たちの不気味な姿が眼をひいた」（127ページ）とある。著者はこうした服装に何の注釈もしていない。だが，この種の服装はタシケントをはじめウズベキスタンなどで多く見かけたので，私見では中央アジア系の女性たちが多く愛用している服装と同じものではなかろうかと思う。私も，この服装には驚異感をあじわったことがある。（拙著『バイカル号は夢をのせて』・文理閣）

この一行はイラン国境で入国を拒否され，その国境から150キロも引き返したアグリの町に泊まっている。ただし，アララット山は見たらしい。それを「今夕見たアラ・ラト山の凄い夕照がまぶたに焼きついている」（129ページ）とだけ記している。

結局，一行はエルズルムで二十日ばかり滞在することを余儀なくされる。その間，著者はトルコの将来について次のような見解を披露している。

「国の大半を占めている半砂漠状の荒地と，アナトリアの未開な高原地帯，それに遊牧民的な民衆気質と一部支配者の官僚的体質，これへの挑戦と改革がこの国の未来をきめるであろう」

（135ページ）

この著者の見解に対して，それだけではないが，私は差し当たり，クルド人問題や宗教問題の解決という課題を追加しておきたい。

この問題はそれまでとして，エルズルムに滞在した著者たちは，その周辺地域を巡検することになる。そこでトルコ人たちの温和さや人懐こさを体感するが，同時にイシャクパシャという遺跡なども見学している。その遺跡のことを私は知らない。また「アラ・ラト山はついに雲の中に頂きをかくしたままで，全容をあらわさなかった。イラン側に入ってから数時間後に遠望できただけで終わった」（137ページ）という悔しさも残している。

なお，このエルズルムに滞在中だったと思われるが，著者は「思索行」らしく，幾つかの意見を披露しているので，紹介しておこう。

○日本の海外旅行者は数多くなり，欧米を紹介しているが，それらは欧米の主要都市のセット旅行が多く，その見聞は諸国民の実態からひどくかけ離れているということ。

○欧州の物価は高いというが，北欧三国を除くと，日本のほうが相対的には安いということ。日本は実質的に「物価高では世界一の狂国」（140ページ）

○日本では「独占的な企業のため…質的に貧弱な食生活をしいられ，消費の自由を独占会社に奪われているということ」。（同前）

○欧米には在る美しい町が，日本にはもうない。…生活の基礎である豊かな住宅が欠けている。（141ページ）

○日本は，かって世界一多彩な自然に恵まれた美しい国であったが，「開発狂国」「公害狂国」，日本は「世界のゴミ箱，『夢の島』」になりつつあるということ。（同前）

○観光とは環境破壊であり，かつ祖先が酷使され，略奪された事物を称賛しながら鑑賞しており，祖先たちが被った苦渋の歴史を無視しているということ。（142～3ページ）

○「少なくとも欧州や中近東の圏内では日本と同様，観光は退廃と浪費と自然破壊をともなったものとして痛感した」（144ページ）ということ。

以上は，おそらく著者がエルズルムでの滞在中に思索したことであろう。これらに対する私の意見は既に文中でも述べているので，ここでは省略したい。

⑧「砂漠の白昼夢」（イラン）

トルコからイランへの国境を無難に越えた著者たちは，アジア・ハイウェイを走って，タブリーズへと向かう。石油資源に恵まれた国だから，同じハイウェイでもトルコと違って，快適な旅となる。

ザンシャンを経て，著者たちは美しい名前の都市スルタニエーを見学。かって，ここはこの地方の中心地として栄華を誇っていたが，いまでは廃墟と化している。景観としては「陽はまさに西の山に沈もうとしていた。崩れかけたミナレット（光塔）と褐色のモスクの壁面に赤い夕陽が映えている」（147ページ）と描かれている。

上記の文で「光塔」とあるのは「尖塔」の誤植である。「光塔」という誤植は，この書物では二度目である。なお，ミナレットを「尖塔」と訳してみても，その宗教的な役割からみても感覚的に馴染まず，ここは「聖塔」と訳すのが適切だと思う。ちなみに一つのモスクにある「聖塔」

の数は６本をもって最多とされ，それはイスタンブールのブルーモスクだけである。集落レベルのモスクでは，通常一本のミナレットだけである。

これより著者たちは，ガスピン，ラント（ラシュト？）を経て，カスピ海へと向かう。私の見たカスピ海はバクー周辺だけなのだが，そこは廃油で海面がすべて覆われていた。つまり，海面汚染の公害というより，「海の破壊」といったような酷い状況であった。そのため，アゼルバイジャンを「社会主義国」と言うのはどうかと思われたほどである。（拙著『バイカル号は夢をのせて』・窓映社を参照のこと）

ところが著者たちによれば，カスピ海の南岸，つまりイラン側の沿岸では，別の問題があったと記している。それは次のような問題であった。

「ラムサールのあたりからはじまった海岸別荘地が，チャールスに来て（も）まだ続いている。広大なイランの領土の中で，最も気候に恵まれ，人口も集中しているこのカスピ海のすばらしい砂浜が，……一部富裕階級の私有地に分割されつくしているさまは，全く驚くべきものだった。……これを問題にしない旅行者には，イランで何を見てきたのかと言いたい」（143ページ）

この文章では，「階級」と「階層」の概念的区別が出来ているかどうか疑問だ。

確かに，素晴らしい海岸が，豪奢な別荘地帯となり，一部の富裕階層に囲われ，占拠されている状況と見すぼらしいイラン民衆の生活ぶりとを対比すれば，その隔絶は資本制社会における一般的な階級格差よりももっと大きいようにみえる。

それだけ大きな問題なのに，著者はそうした別荘地が形成されてきた歴史的経緯を説明していない。この別荘地の所有が王侯貴族の権力または宗教的な権威によるものか，或いは石油成金によるものかという所有者の階級（階層）の分析，また概算でもよいから，豪奢な別荘の戸数と別荘の一戸あたり保有面積を明らかにして欲しかった。私の勝手な臆測だと，一戸あたりの保有地面積は１万から10万平方米ではないかと思われる。

著者たちは，チャールズからテヘランへと，エルブルス山脈を越えていく。断崖絶壁の山越えは大変だったらしい。テヘランでは大使館員が尊大だったが，ここでは丁寧に対応してくれたので感謝している。しかし，著者はこれまで各地で会った外交官の多くが大柄な態度であったと非難している。

私個人としては，まだ日本の大使館や領事館にお世話になったことがない。したがって，著者が非難する問題については意見を保留して先に進みたい。

著者は，イランの近代史を簡単に語る。今は「第二次経済五ヵ年計画と上からの近代化革命を遂行中」（152ページ）だが，「いまだに地主の支配力は強く，近代工業の建設もおもうように進んでいない」（同）と記している。それでも，「文盲率は80％から60％台に下り，全小作地の三分の一が開放される」（同）という成果を挙げたとしている。

アングロ・イラニアン石油の国有化については知っていても，イランの文盲率や小作解放率などについては知らないから，これらは私にとって貴重な地域情報である。

ところで，その年が「ペルシア帝国建国二千五百年」にあたり，古都イスファハンが記念行事のために閉鎖されるというので，著者たちは，テヘランよりシラーズまで直行することにしたようだ。イスファハンは，そのほぼ中間地点に位置している。途中で交通事故死を目撃した件および半砂漠状のザグロス山地については，これを割愛する。

私は古都イスファハンの美観を知りたかったが，著者は，「イスファハンは世界の半分」「世界の美の中心」（153ページ）と決まり文句を紹介し，「マスジッド・シャー・モスクの紫紺や青緑の色タイルの美しさは，世界でも有数なもの」（154ページ）と「ここは（観光都市だけに）市民は外国人慣れはしている。チャドリをかぶった女も，カメラを向けても逃げかくれしない」（同）と記している。この記述だけでも，この地を旅しようとする者にとっては貴重な情報となる。もっとも，そのことは現地でゆっくりと確かめねばならない。政治体制などが変化すれば，そうした風習もまた変化する可能性があるからである。

イスファハンを過ぎ，著者たちの車は広大な荒れ地が続くザグロス山地を走り，シラーズに近づくにつれて，道は良くなると記している。だが，私の関心はシラーズへの途中にある古代ペルシアの巨大な遺跡都市ペルセポリスである。おそらく建国二千五百年記念祭というのも，このペリセポリスで行われるのであろう。事実，そうであった。

著者はペルセポリスを次のように捉えいている。「シラーズの北60キロメートル」（157ページ），「背後に紫褐色の岩山が連なり，アテネやローマの遺跡に匹敵するほど，このペリセポリスの規模は大きい。ここは海抜1700メートル…風は冷たいが，日射は強い」（同）「この遺跡のみごとさは，その数しれぬレリーフにあるが，その芸術性は前世紀のエジプトのそれや，同時代のギリシアのそれとくらべて見劣りする」（同）「謁見の間，百柱の間はさすがにみごとだが，そこには周辺諸国の文明と後世の職人の人工的なはりあわせのあとが見える。クセルクセスの『万国の門』などは，いかにも東方の絶対君主のそれらしい。共和制を実現したアテネの神殿址とはまったくちがった印象だ」（158ページ）。

残念ながら，私はイスファハンの町やペルセポリスを訪れたことはない。だが，写真では数多く見ている。それは，この二つを見学する旅行計画を何度も作ったからである。

それにしても，著者のペルセポリスに対する評価は余りにも低すぎる。写真で見るかぎり，凱旋路に整然と平行している列柱の数，あれはエジプトにもギリシアにも無かった。ただしシシリー島西南部のギリシア遺跡にはあるかもしれないが，これは私も見ていないので言及しないことにする。要するにペルセポリスの工学的都市構造は，まさしく奴隷制国家，換言すれば周辺地域を征服した強大な国家権力を象徴するような形状なのだ。

その点では，同じ奴隷制国家であっても，エジプトやギリシアの遺跡には無い独特のステイタスを持っている。この点は著者も肌で感じたらしい。確かに著者は「人民不在の栄光や絶対王の装飾文化は好かない」（159ページ）としている。だが，これは好き嫌いの問題ではない。

著者たちはペルセポリスの見学を終えると，450キロ離れたイスファハンまで引き返し，同行者の一人を送り出すため，さらに空港のあるテヘランに戻る。それよりはエルブス山脈の南縁とカビール砂漠北側との間にあるアジア・ハィウェーを東行することになる。

その間，テヘラン近くのキャンプ場で著者たちは，世界の各地から集まったヒッピー族と交流する。その数は五十人ほどだったらしい。

カビール砂漠を，著者たちはセムナンを出発しシャールード（シャーフルード）を目指す。シャールードからサブザバールまでは悪路，さらにメーヤメイまでは「痛烈な茶褐色一色の山地」と形容し，ツァイダールからミァンダシットまで車で走る途中で，廃墟となった巨大なキャラバンサライ（隊商の宿）を見つけ，そこで著者は「白昼夢」に浸る。著者にとっては素晴らしい「白

昼夢」であったろうが，ここでは割愛する。ただし，著者は，先程のペルセポリスとこの巨大なキャラバンサライとを比較し，後者に軍配を挙げている。その理由を著者は次のように記している。

「民衆史跡は一人のエリートの栄光も必要としない。生活を賭けた隊商たちの不安の一夜と享楽の一夜の想いが，重厚なペルシア織の絨毯のように，幾重にも織りかさねられ，捺染されて，私たちに生きる喜びを伝えてくれる」（169ページ）からである。

著者たちは，ミァンダシット（位置不明）を過ぎて，カハーク村（？）までの途中，遠くに「目に見える水」を追う。だが，それは蜃気楼である。私はサハラ砂漠で度々見かけた。だが，この「逃げ水」現象は砂漠だけではなく，日本でもよく見かける現象である。著者たちが何故それを知らなかったのか不思議に疑う。同様に，彼らには当然のことであっても，私の知らないことが多々あるから，それ以上には問わないことにする。また，旅の途中で出会った日本の会社員たちの不謹慎な言動について著者は批判しているが，それも不問にしておこう。

メシェッド（マシュハド？）より90キロほど手前にあるカビール砂漠だが，そこで眺めた星座（星宿）の美しさと夕日の素晴らしさを著者は感激を込めて叙している。私はそこに著者の「心の余裕」を見る。私も妻と一緒に旅したたオーストラリアの砂漠（ウルル）で眺めた天空は星数も多く，実に美しかった。しかし，サハラ砂漠やタクラマカン砂漠の旅では，旅そのものに精一杯で，ゆっくりと星を眺めるだけの気分的余裕が無かった。

さらに著者は「メシェッドのペルシア商人」の逞しい商魂について語っている。詳細な内容の紹介は割愛するが，要するに，著者たちがペルシア絨毯を高く買わされた話だ。

私にもその経験がある。トルコで革コートを買ったが，相手の言い値で買ったため，相手から見くびられた。商人は少年に向かって「彼はジェントルマンだ。チャイを持ってきてくれ」と言って，私を小馬鹿にしたのである。結果として私は５割ほど高値で買ったようだ。値切ることが慣例になっている国々ではあるが，要するに，その値切り方に工夫が必要なのだ。

この⑧「イラン」を終えるにあたって，著者が日本宛に送った通信（ここでは割愛している）の中で，ペルセポリスに関連して，ちょっと変わった視点を提起しているので，やや長くなるが，それを紹介しておこう。

「ペルセポリスの裏に『慈悲の山』と呼ばれる赤土の丘がある。そこに登ってながめると，紀元前331年にアレクサンダー大王の軍によって放火された『ペルセポリス炎上』の場景がよみがえる。このマケドニア王の侵略戦争によって，どれだけのハレムが燃え，女たちがひきずられ，男たちが虐殺されたであろう。それから，この宮殿も焼失し，砂に埋もれ…」（180ページ）

そうか，私は写真で見たペルセポリスの壮大さに心を奪われていた。またアレキサンダーの征服を東西文化の交流を促した「偉業」として理解する見方に囚われていた。それを一掃した著者の視点はさすがに素晴らしい。ここでは褒めておこう。

⑨「曠野の道・荒野の人」（アフガニスタン）

著者たちは，アジア・ハイウェイを通って，アフガニスタンへの道を辿る。イランのメシェッド（マシュハド？）からカブールまでの荒野を通るのだ。マシュハドからヘラート（アフガン）までは一本道だが，ヘラートよりカブールまでは，ババ山脈の南北いずれの道を辿るのであろうか。

とにかく著者のアフガンに対する第一印象は「どこかみすぼらしく，たいそう土俗的に見え」「遊牧民的な緩慢なもの」（184ページ）であった。

ちなみに，私はアフガンを訪れたことはない。ペシャワール（パキスタン）からカイバル峠を利用してアフガンへ入国する計画を立てたが，イスラマバードにある民宿シルクロードに滞在中，主人の督永忠子さんから「アフガンへ行くのは結構ですが，日本人10人が行って，１人しか戻ってきません」という話を聞いて，私はその計画を中止した。だから私は「アフガンはレアメタルなど各種の鉱物資源が豊富である。ソ連をはじめ各国はそれを目当てに支配しようとしている。のちに，政治的には混沌としており，バーミアンの石仏がイスラム原理主義のタリバンによって破壊された。そして主要な都市は首都カブールと西部のカンダハルである」といった程度の知識しかもっていない。

著者たちが車から眺めた風景は「広大な砂漠地帯がつづく。その道ばたに時折，男たちがごろりと寝ころがっている。山羊や羊の数も少ない。イランと往来するトラックの姿もほとんど見うけられみない」（同）というものでり，翌日も「眼前には緑の気配ひとつない。無人の灰色の荒野がつづくばかり」（185ページ）というものであった。

そうした状況のなかで，著者は「『天皇島』への自己嫌悪』」に陥る。この嫌悪の内容については割愛する。確かに著者のいうような忌むべき状況が日本にはある。だからと言って，それを全面否定するだけの勇気を私はもたない。なぜなら，そんな状況があっても，私達はその中で懸命に「もがいて」いるではないか。それが現実というものである。

そんな砂漠的状況の中で，著者は「一人の国際放浪者」に出会い，各国のヒッピー連中の行動形態について知る。詳細については省略するが，ある意味では，著者がそうした放浪的行動を求めていたのかもしれない。

目的通りに，著者たちは「ヘラート」に到着する。ここを著者は「怨念の古都」と称して，アレキサンダー，チンギス・ハーン，チムールの襲撃に壊滅していった過去を振り返っている。それと同時に，ヘラートの様子を丁寧に描き出している。私はアフガンには未踏なので，長さを厭わずに，引用しておこう。

「町の顔つきがまったくイランと違う。顔まですっぽり蔽った女たちのチャドリ姿がまるで違う。店のつくりが変わり，店の床にあぐらをかいている商人たちの姿態や雰囲気がイランとはまったく違う」（190ページ）「モスク通りの両側に店をならべている古着屋の列，古タイヤの再生屋，靴屋，金物屋，雑貨商，ムウッとした悪臭を放つ羊肉屋，食品屋。その道傍にねそべっている物売り。カタカタと走る馬車。町に入りこんできたらくだの隊商。そしてひときわ美々しく飾り立てた乗合馬車。チャドリの女は幽霊のように最初は見える。だが，よくみると，その被衣はイランのと違って頭がしまり，ちぢみがつくられ，よく出来ている。それに刺繍があって細工がこまかい」（同）

上記に引用した文章から感じることは，ヘラートの雰囲気はチュニス（チュニジア），フェズ（モロッコ），マラケッシュ（モロッコ）などの各地で見たスーク（市場）のようでもあり，近くではペシャワール（パキ）やラワルピンジー（パキ）の市場のようでもある。ホータン（中国）やトルファン（中国）などに似た町の雰囲気がじっくりと伝わってくる。簡単に言えば，「遊牧的イスラム文化」とでも言ったらよいのであろうか。

さすがに著者は歴史家（近代史）である。ヘラートの過去について「かってチムール大帝国の首都であり，爛熟した中央アジアの文化が栄え，数百人の著名な詩人や画家，音楽家，建築家，科学者，学僧などが高遠な理想を語りつつ遊歩した町」（191ページ）と紹介している。私は，こうした「著名な人々」を誰も知らない。

著者たちは，ヘラートからファラー（ファラーフ？）へと向かう。ババ山脈の西から南へ進み，カンダハルへ行くものと思われる。ただし，その道は「無人境の荒れた美しさ」（192ページ），具体的には「二，三千メートル級の山々の鋭い刃先のような岩峰のシルエット」（同）というものであった。ここもアジア・ハイウェーで，著者は，「うす汚れたターバンを頭に巻き，ほこりにまみれたダブダブの衣をまとった男たちが，道ばたにごろりと昼寝をしている」（192ページ）と描いている。この道路はソ連からの援助で建設されたものだが，アフガニスタン側は「竹棹の踏切式の検問所をやたらと道路に設けて，通行料をとっているだけ。……トラックを改装したバスが，屋根の上まで人と荷物を満載して，ルウンルウンと苦しげなエンジン音を響かせながら走り去っていく」（同）

著者によるアジア・ハイウェイの描写は実に巧みである。私は，このような道路状況をパキスタンやインドで味わってきているが，それはこれらの国々で一般的というか，独特のものらしい。とくに，「ターンパイク」のある私設（？）通行料徴収所の設置が多かったのは，インドのシッキム地方（ガントク周辺）からシリグリまでの区間においてであった。つまり著者の文章は，私が過去に経験した「通行上の腹立ち」を否応なしに蘇らせてくれたのである。

著者たちはカンダハルへの道を辿り，レギスタン砂漠を走る。そこで著者が見たものは，無人砂漠である。だが，途中の集落では「小屋がけをした西瓜売り。…襤褸の群。そしてターバンの男や体中を布で隠した女たち。…兵士とポリス」（194ページ）

ここで著者は問題を提起する。それは「アメリカの後進国援助計画も，ソ連のそれと同じくアフガニスタンでは成功したとはいえない。遊牧民は定着せず，農業の開発はすすんでいない。大地主や小作制度をそのままにして，遊牧民の価値観をそのままにして，教育も施さず，ただ，技術面だけで問題を解決しようとした援助国の考えが甘かったのだ」（同）というのが，その問題提起である。著者は「甘かった」と評価しているが，もともと開発援助なるものが，援助国の目的（思惑）が「援助」ではなく，「自国（の巨大資本）がアフガンで鉱物資源を確保するためのインフラ整備」であったとすれば，遊牧民の生活を無視した結果になったとしても不自然ではない。それは単なる「甘さ」として片づけられる問題ではないのである。著者が「アフガニスタンの反動的な王制や地主制をなくさないかぎり，どうして人民の福祉になる国土開発が成功しようか」（195ページ）と問題を提起している以上，当然のことながら開発援助国の目的についてもそのように考えていたと思うが，そこまでは露骨に言わなかったのだろう。

歴史学者としての著者は嘆く。モンゴルの侵略が「ニシャブール（イラン）で，ヘラートで，そしてこの町カンダハルで」行われ，「水系を破壊し砂漠に化してしまった」（同）と言う。この無人の砂漠が，自然的荒廃ではなく，人為的結果だと見なす著者の目は確かである。サハラやゴビ，タクラマカンの砂漠を見るかぎりにおいて，私はそのような発想をすることができなかった。そこでは自然の圧倒的な猛威が，そうした発想を抑制してしまったのである。だが，この地方を自分の眼で実際に見るまでは，意見を保留しておきたい。

カンダハルはアフガン第二の都市なのに，著者の印象は余り良くなかった。雲を見ない晴天が続き，町には録な食堂がない。銀行をはじめ町のいたるところに銃をもった兵隊がおり，物騒である。大麻を取引しているヒッピーたち。それから売値の十倍も吹っ掛ける路上の商人。その商人に二倍以上の値段で麻のシャツを買わされた著者の気分が良いはずがない。自己嫌悪に陥りながら，筆者は首都カブールへの道を辿り，手前のカズニの町へ到着。だが，そこのホテルが汚かったので，カブールまで突っ走る。

深夜にカブールに到着。なおアフガンで一番豪華なインター・コンチネンタルホテルは一泊が42ドル（時価で１万4300円）なので，結局ホテルの駐車場に泊まることになる。

翌日は，インド，パキスタン，それから日本の大使館を巡るが，全て用を達せず。

ヒッピーたちは，汚い恰好をしているが，有名なカイバル・レストランで豪華な美食をしている。しかも何にひとつ仕事をせず，マリファナを吸っている。現地の青年たちは，彼らを「帝国主義の寄生者め！」（199ページ）と呼んでいるそうだ。

食事のあとでインド大使館に行くが，そこはヒッピーで一杯。なんとか一時間掛かってヴィザを申請，受け取りは四日後。その期間を利用して著者たちはビンズークシュ山脈の北側を探訪している。

カブールを出ると，そこは豊かな農耕地帯で，国道には人が溢れ，ある町のバザールなどでは人が一杯，金物屋，陶器屋，果物屋が多いと記している。

チャリカール，それからアジアで最も標高が高いトンネルがあるというサラン峠。およそ４千メートルの高地だが，ソ連製の道路は素晴らしいと記している。

著者たちはプリ・ホムリの町を拠点としてクールム，それからマザリ・シャリという二つの町を巡る。マザリ・シャリについては，次のような美麗字句を並べている。「森のある大きなオアシスの町には，壮麗優美なことで有名な大寺院がある。…蜃気楼かとまごう青色燦然たる大モスク」（201ページ）「その紺青のまる屋根と，黄線をもちいた幾何学模様の華麗さは，この世のものとは思えない」（202ページ）「マザリ・シャリという言葉自体が，『聖者の森』という意味だという」（同）

そして著者が感心しているのは，異なる多くの民族が一つの宗教のもとに集まり，モスクという公共施設で融和しているという事実である。確かに，それは一つの事実である。だが，同じコーランを唱えながら，シアー派とスンニ派の対立があることも事実である。これはイスラム教だけではない。仏教も，キリスト教もそうである。現実の社会経済が理念としての宗教を規定し，逆に，その宗教が現実の社会経済に影響を及ぼすという反作用をしている。この上部・下部構造の相互作用についてはもっと深く考えねばらない。

続いて著者たちは，このマザリ・シャリフより西に向かい，バルク（Balkh）に達する。

このバルク（バルフ？）について歴史家の著者は次のような説明をしている。

「今から千三百四十年前，大唐帝国の玄奘法師が，天山山脈を越え，サマルカンドから南下してアム河を渡り，いったんクンドゥズに滞在してから，ここバルクに足をふみいれた。その時は，まだ付近は広大な沃野で，世界のあらゆる町の母とよばれた都の繁栄が残されていた」（203ページ）「『大唐西域記』によると，このバルクには百をこえる仏寺に，三千人あまりの僧侶が充満し，さながら小王舎城の観があったという」（同）

著者は，玄奘法師が滞在した以後のバルクについて，岩村忍氏の『アフガニスタン紀行』を引用しながら「人骨の転がる都」を紹介している。さらに著者は深田久弥氏も，この玄奘が通った道を歩きたかったと記している。いわば，このバルクは，旅行小説家にとって，是非とも訪れてみたい垂涎の場所なのだ。

私はウズベキスタンのサマルカンドやブハラ，中国のカシュガル，パキスタンのフンザやペシャワールなどへは行ったことがある。だが，このアフガンだけは未踏である。それだけに，バーミアンをはじめ，このバルクには是非とも行ってみたい。そんな訳で，このバルクやマザリ・シャリフなどについては，やや詳しく状況を紹介してみたのである。

以下は私の夢だ。まずは，中国のイーニンからアルマティ（旧称アルマ・アタ，カザフスタン），ビシュケク（キルギスタン），イシク・クル湖，タラス（唐とイスラムの古戦場），タシケント（ウズベキスタン・既往）～空路～コーカンド（タジキスタン）～空路～ドシャンベ（同），ホルム（アフガン），マザリ・シャリフ（アフガン），バルク（アフガン），それよりバーミアン，カブール，カイバル峠を経由して，ペシャワール（パキスタン・既往）というルートを，私は70歳ぐらいの時に作成している。

このルートは，玄奘法師がインドへと辿った道と同じである。だが，その旅行計画はもう遠い昔のこととなった。2022年現在のアフガンはタリバンが政治的に支配しており，そこへ無条件に行くことは不可能であろう。

ところで著者はアフガン東部より中国へ抜けたいけれども，「パミール高原からカシュガルへ出る地理が分からない」（206ページ）としている。確かに難路である。しかしながら，私がタクラマカン砂漠を旅したときには，タジキスタンにはカシュガルから山を越えてオシ（OSH）へ行き，そこからフエルガナ経由でコーカンドへと続く道があったと思うし，その後もコーカンドからカシュガルへトラックで通ってきたという話を聞いたことがある。

もっともアフガンと中国との間には，1980年代の詳細な地図を見ても，国境を越える自動車道は一つも見当たらず，僅かにタクシュクルガン（既往）へ抜ける山道が二本見られるだけである。つまり，アフガンから中国のカシュガルへ直接に車で抜ける道はなく，北のタジキスタンを経由するしか方法はないようだ。仮に，パキスタンのフンザ（カリマバード・既往）の南側になるギルギット（既往）を目指すとしても，そして，アフガン国内に途中まで自動車道があったとしても，途中からは山道を歩いて山越えしなければならないという状況になっている。

結局，カイバル峠を越えて，パキスタンのペシャワールまで，つまりアジア・ハイウェーを利用し，あとはカラコルム・ハイウェーを北行し，フンザからあのフンジュラフ峠を越え，タクシュクルガン（中国・既往）を経てカシュガルへ行くのが最適ということになる。

著者の「思索行」につい巻き込まれて，話が逸れた。話を元のバーミアンに戻そう。ただし，そのバーミアンについては多くの人が語っているから，それを避けたい。

著者たちが泊まった「バーミアン・ホテル」からは，「二大石仏をふくめて，数百という石窟寺の跡が一望のもとに収められる」（211ページ）とし，次の日は「シャリ・ゴルゴラ（亡霊の町）へ出掛ける。リャリ・ゴルゴラは「肥沃なバーミアン盆地に，ちょうど兜を伏せたように聳立している。バーミアンの中でも最も堅固な城砦だった」（同）が，モンゴル軍が住民を虐殺してしまった。そして「いまなお各所に人骨が散乱し，村びとは月明の晩など幽鬼がさまよう丘といっ

て怖れる」（212ページ）と記している。

著者たちは，この「美しいバーミアンの里と幽鬼の丘」，それに「砂漠の中の神秘な湖」（バンディ・アミール）を見て，カブールに戻る。

著者は病気（チフス？）を治癒してから，パキスタンへのカイバル峠を目指す。途中は石窟などをみながらジャララバートに到着。大学もある保養地だが，近くにあったハッダの遺跡にはなんら仏教遺跡らしきものは無かったとしている。

いよいよカイバル峠。「世界の難所」と言われているが，著者たちは難なくこれを越えている。著者は，これまで越えてきた各地の峠のことを思い出しながら，「カイバル峠はものの数ではなかったのである」（217ページ）といいながらも，「インドをめざした多くの人々が通った歴史的な道なのである」（同）と結んでいる。

⑩「聖なる大地に生きる」（パキスタン・インド）

カイバル峠を越えて，著者たちはパキスタンのペシャワールに到着する。著者の第一印象は「ペシャワールの町に入ったら人間が溢れかえっていた。この小さな町になんと三十万人を越える人口が爆発しているという。急にこれまでの砂漠地帯が懐かしくなる」（217ページ）というものであった。

私がペシャワールに滞留したのは1999年である。つまり著者たちの旅に遅れること28年，しかも，この年の９月にはパキスタンで政治クーデーターが勃発し，またアフガン紛争も激動期だったから，町中のいたるところに武器弾薬が溢れていた。店頭に，自動小銃やピストルはもとよりバズーカ砲まで並んでいた。この年も著者たちが訪れた時と同様に人々で溢れかえっていたが，人々の顔色は薄赤黒く，表情は険しく，忙しげで，なんとも殺伐とした雰囲気であった。したがって，ペシャワールについて，著者たちが滞在した頃の印象と私が受けた印象を比較するのは無理である。

さて，色川大吉氏を中心とする「ユーラシア大陸学術調査隊」（略称「ユーラシアどさ廻り隊」）の「思索行」も最終編となった。

著者はアフガンでチフスに罹ったらしい。ペシャワールからラホールへ着いたとき，罹病で三日ほど寝込んでいる。それよりも，問題だったのは，いかにインドへの国境を越えるかであったらしい。とにかく越境のためには5000ドルの保証金と140ルピーのカルネ（国際自動車保険料）を支払わねばならなかったようだ。その理由を私は知らない。

たしかにラホールからモヘンジョダロやハラッパに行くには相当の距離がある。だからと言って，そうした行動を考える余裕があるのなら，なぜ仏跡タキシラを中心とする地方，すなわちガンダーラ美術を見学して来なかったのか，理解に苦しむ。私が見学したとはいえ，ペシャワールまできて，ガンダーラを見逃す手はあるまい。

もっとも，この「どさ廻り隊」は，「学術調査隊」という「勧進帳」を読み上げ，インド国境を無事に越えることができた。これは素晴らしいことである。もっとも，28年後の私はラホールからバスで国境へ行き，パキ側からインド側へ何事もなく歩いて渡った。インド側にいた兵士たちものんびりしたもので，国境にどんなトラブルがあったか覚えていない。パキスタンの入国にパスポートは必要だったが，日本人はインドの入国には不必要だったこともある。もっと言えば，

私の時にはイン・パ戦争が一段落していたからであろう。時代的差異が大きすぎるようだ。

この地に至って，何故か，インドにおける「どさ廻り隊」の動きは早すぎる。パキスタンでも，ラホールには行ってもラワルピンジーやイスラマバードの市街地に寄っていないようだ。またインド国境を越えると，野宿したのち直ぐニューデリーに到着する。しかし，その途中には，鉄道の終着駅であり，有名な「黄金寺院」がある大きな都市，アムリッツアルをはじめ途中にある町々の見学が，著者の旅には抜けている。

ニューデリーへ到着して直ぐに，「隊」はイギリス帝国の落とし子であろう「驚くほど精密な道路地図」（224ページ）を入手している。

これより「隊」は，レッド・フォード（赤い城塞）を見学するが，そこでは傭兵（セポイ）がイギリス軍と戦ったと言い，それが明治維新と関連していると著者は言う。私は「セポイの乱」を知っているが，それと明治維新との関連を知らない。

次に，その帰途，隊は「ほんもののインドの聖者」に逢ったとし，彼と欧米のヒッピーとを対比させている。著者は両者の違いに，深く感じるものがあったらしい。

次に月夜のタージ・マハルを見学するためにアグラへ「隊」は進む。そこでインドの青年より，タージ・マハルは「22年の歳月をかけ，延べ20万人の人民を使い，220万ルピーの巨額を投じて成った」（225～226ページ）という話を聞く。これを聞いて，著者は，これだけの犠牲を払ったのに，インドの民衆があえてこれを怨みとせずに，憧憬し，今なお王妃の純愛を讃えているという事実」（226ページ）はどこかおかしいと反発し，著者が訪れた当時にはタージ・マハルの近くに売春村があったと皮肉っている。

この調査隊は，やはり見るべきものを知っている。だが，それは一般的な観光地だ。隊はアグラからジャンシーを経由して，カジュラーホへ。私はその地に歓喜像のあることは知っているが，未だ訪れたことはない。著者の紹介によれば，「カジュラホでは有名なヒンズー寺院を見る。七，八世紀以降につくられた官能的な彫刻群が，びっしりと大寺院の壁面を埋めている。……これはヒンズー教シヴァ派の教義からくるもので，神聖な性の法悦の讃歌としてうけとめるべきものだ」（227ページ）としている。

ここがインドの有名な観光地（世界遺産）であることは知っていた。だから著者がこれらの彫刻について深い見識を展開するのではないかと思ったが，期待はずれであった。

私はインド旅行中に，ある若い女性よりここの歓喜像群の話を聞かされていたが，その宗教的奥義を知るまでには至っていない。

カジュラーホよりベナレス（バラナシ）への途中，この隊はインドの寒村で，老いたる一人の遊吟詩人に，また多くの村人出会う。その誰もが豊かな心境の持ち主であった。そこで著者はインドの内面的な豊かさを認識する。

また著者は，インドの道路について驚くべき感想を述べている。それは「インドの『道』の思想」と著者が名付けたもので，その一端が次に引用する幾つかの文章である。

「インドは日本とは逆で，国道からそれて奥へ入れば入るほど豊かな感じが増し，また道もよくなっていった（229ページ）…地方道の場合，舗装部分はトラックが一台通れるくらいしかない。それが中央に一本あるかぎりで，その両わきには一段下がって，二倍以上もの幅のある広い緑の帯がとられている。そこは草道で，…牛を追う農夫，さまざまな野獣や野性の鳥などが，白猿や

リスなどと仲良くこれを使っている。…その緑の二車線が，インド的な人間と動物との楽園をなしているということだ」（同）

広大なインドの道路一般を著者のように「豊かな」と評価するつもりはない。それだけの見聞を私はしていないからである。しかし，バスやタクシー（力車を含む）で，また列車の窓から眺めたかぎりでは，著者とほぼ同じような感触を得ている。だが，オールド・デリーやビハール州の一部ではそうとも言えない状況があった。

ここで著者が描写したバラナシの街路風景を紹介しよう。

「朝がた，道をはさんだ店のまえの下水（というより溝）で，子供たちがこちらに尻を向けて糞をしている。汚水はすてる。路傍で行水はする。喰いかすを投げる。赤い血のような痰を吐く。手ばなをかむ。その汚水のまえで，ものを焚き，喰いものを売る。しゃがみこみ，ねそべる。べったりとすわる。放尿をする。それらの汚水は結局，ガンガ（ガンジス河）に入るのだ」（231～232ページ）。

上記の文は，著者がバラナシの町風景を描写したものだが，そのような状況は20年後に見たオールド・デリーの貧民街での風景と同じであった。

ところで，バラナシに限って言えば，それから20年後に私が見た街路景観とはかなり違っていた。

朝のバラナシでは道路という道路が牛の糞で茶色に染まっている。つまり，牛の糞の下に道があるのだ。だから，観光客はいずれ牛の糞を踏むことになる。そうして「バラナシの観光」が始まる。牛は「聖なるもの」である。だから牛を排除することはできない。このような問題は，色川氏が旅した時期には無かったのか，その点が気になる。つまり，突飛な発想だが，最近になって，バラナシでは路上に堆積した夥しい牛糞を観光客が踏みつける，そのことを観光資源とするようになったかもしれないからだ。それとあわせて猿害もある。空中を，つまり屋根上を走る悪質な猿の群れ。だが，猿害による苦情はそれほどでもないようだ。動物を大切にするインド人の心か，あるいはまだ我慢できる程度の猿害なのであろう。

著者は，豊かな自然と人情に溢れた農村部と人為（観光）で汚れた都市部を対比をしているのであろうか，それとも，何事もいずれカーストの執念と無数の人骨が埋まるガンガに流されていくという無常の思いに囚われているのだろうか。

私は聖なるガンガで泳ぎ，全身を水中に沈めたことがある。汚いなどといった意識はどこかに失せていた。ここでは雄大な自然と悠久の歴史を感じさせるインドの圧倒的景観，それに加えて「無限の生命」という世界観があるようだ。民宿「久美子の家」の主人も同じ心境だろうか。

著者たちは，バラナシを後にして，サルナートやブッダガヤを訪れている。いずれも，有名な仏跡である。サルナートについては「静寂と清浄さ」（233ページ）で，美術館は素晴らしく，「シヴァ神の悪魔退治の大作には，現代彫刻をも圧倒する力を感じて敬服する」（234ページ）と記している。しかも，日本における飛鳥白鳳や天平の美術を，アジア史全体からみれば，「辺境の亜流文化の開花にすぎなかったのではないか」（同）と自問している。ここに至って，著者は日本の，そして自分の矮小性を感じたのかもしれない。

ところで著者は，ガンガの治水についての施策について問題を提起している。それは，これまでに旅して学んだことの総括であろう。

「まず，上流にはインドにふさわしいダムを百ほどつくり，中流には遊水池を千ほどつくって，ガンガの季節的氾濫を緩和する。これができないではインドの農業を興すことはできない。さらに品種の改良，技術の改善，その大前提としての耕作民への土地解放が絶対必要である」（234～235ページ）とし，最後には「文化大革命的な方式が最短コースになるのではないか」（235ページ）と結んでいる。

著者は以上のような政策展望をもちながらも，昨今の政府は「地主の擁護にひきずられて」（同），この根本問題を解決できず，「５億の民を空腹のままにしている」（同）と悲観している。

ところが，バラナシから少し離れ，ブッダガヤやナーランダーに来ると，著者たちは別のインド，千数百年前のインドに出会うことになる。ガヤでは，巨大な仏塔の周辺を歩きながら瞑想し，ナーランダーでは，かっての仏教学院の建ち並ぶ赤アドベ（日焼レンガ）の偉観を見ながら驚嘆し，併せて玄奘法師がインドを訪れようとした理由を知り，その偉業を偲ぶのである。

そうした著者の追憶的感触は，それから20年後に現地を訪れた私が，これらの土地で感受した印象と全く同じである。つまり，ナーランダーでは仏教教育が盛大な規模で行われたという歴史的感触と，ガヤでは巨大な仏塔とその周辺地域の広々とした大自然の豊かさという景観的感触とを同時に味わえるからである。

もっとも私はガヤで強烈なカースト的差別を体験した。それは力車の運転手と一緒に食事をしようと或るレストランに行ったのだが，そこの店主は「その男の入店はだめだ」と運転手の入場を拒否したのである。ただし，このカースト制度が社会的分業を反映し，職業確保のための一つの社会的手段になっているということも学んだ。

またナーランダー近くで利用した天然温泉風呂では，ヒンズー教徒はもとよりキリスト教徒や仏教徒は入浴を許されていたが，イスラム教徒は入浴を拒絶されていた。ここには明確な宗教による人間差別が行われていた。なお，ヒンズー教とイスラム教との対立が生ずる根本的原因は，商品売買の利害関係だという話を私は聞いた。だが，その話をどこまで信用してよいものか。

著者たちは，上記のような「二つのインド」を体験したのち，有名な避暑地であり，かつまた著名な紅茶の産地であるダージリンへと向かう。そしてインドで最も貧しいと言われるビハール州からは北東に位置するシリグリの町に到着する。

そのシリグリまでの途中で，ガンガの大氾濫地帯を走破することになるのだが，その氾濫状況を著者は次のように表現している。

「冠水した広大な水田，手のつけようがない一面の泥没」（239ページ），「水牛の屎臭が鼻を突く」（同），「河面の広さは水平線が見えるほどだ」（同）

実際に，インドの農民たちは，上記のような状況の中で過ごしている。しかも幾千年にわたって繰り返してである。「河蒸気が走っている」（同），「民衆は，黙々と藁の小屋を建てなおし，泥をかきのけ，畑をつくり，破壊された道を修理している」（同）

こうした凄まじい景観を直視しながら，ともかく著者たちはシリグリに到着したのだ。

このシリグリについて，著者は次のように語っている。「シリグリは最前線の町といった感じで，軍人と軍用トラックで溢れていた」（241ページ）このような状況にあったのは印パ戦争との関連であろう。私が旅したのはずっと後の時期だが，シリグリは田舎の静かな町だった。

なお，この地方は茶畑が多い。しかも人々は，イギリス人によって紅茶を飲む習慣すらつくら

れ，「イギリスの大地主，ブルジョアのふところを肥やすもとになっている」（同）と著者は述べ，さらに，「この地方には今でも一人の地主で百エーカー（約400万平方米―杉野）からの茶園を経営し，所有しているイギリス人がいる」（241ページ）という見聞を付記している。ここで著者はイギリスにおける植民地経営の巧妙さを指摘している。そこで記載されていることは，地域経済や植民地経済を研究する者にとっても，研究資料として大いに役立つと思う。

さて，地図をみれば判るように，ここシリグリはネパールの東，東パキスタン（現在はバングラデシュ―杉野）の北，シッキム地方の南，それに隣接するブータンの西南，アッサム地方の西に位置している。つまり，地政学的に言えば，そうした複雑な地方の中心部にある。同じインドであっても，シッキムとアッサムへ行く場合，それぞれの入域許可証が特別に必要となる。私はシッキム（中心の町はガントク―杉野）へ行ったので，入域ビザをガントクの手前の町で入手する必要があった。

ちなみに，シッキム（ガントク）からは，チベットへ通ずる道路がある。なお，この付近からはヒマラヤ東部に位置するカンチェンジュンガ（8598メートル）を西北に眺めることができる。

繰り返すことになるが，シリグリは，上記のように，この周辺地域における交通の要所である。もとより，空港もあるが，何と言っても有名なのは狭軌で有名なダージリン（登山）鉄道の始発駅があることである。もちろんアッサムやコルカタ（カルカッタ），それからバングラへの鉄道もある。西のネパールへは道路が通じている。

そのシリグリを過ぎて，著者たちはダージリンへと向かうのであるが，車だからダージリン鉄道と並行した山道を登って行くことになる。

車で山道を登って行ったからであろうか。この鉄道にはループ式登山線路が有名なのだが，著者はこのことについて語っていない。

ただし，地域的な問題の所在については鋭く指摘している。「複雑で不自然な境界線は，実はイギリスの分割統治政策が残した禍根であった」（240ページ）といかにも歴史学者らしい指摘だ。要するに，現在のシリグリは地政学的に要所であっても，それは人為的な要所なのである。

著者たちは，ダージリンまでの風景を次のように表している。「グーム峠に出たとき，…豁然としてカンチェンジュンガの氷峰が大きく眼の前にひらけた…この世界第三の高峰，それよりエベレストまで延々とつづくヒマラヤの大岩峰は私を魅了した」（242ページ）

これは著者の偽らざる心の動きであろう。ヒマラヤ山群を眺めた人間は誰しも大自然の威容に圧倒され，強い感動を覚えるものである。まして，トルコのアララット山に関心を寄せていた著者である。カンチェンジュンガの巨大な氷峰を見て驚愕したのも頷ける。私自身もそうだった。

さて，ダージリンについては「ヒマラヤ狐の毛皮が驚くほど安い。また，日本でも有名なダージリン茶が大きな袋で売買されている」（同）と記している。

ヒマラヤ狐の毛皮についてはともかく，ここで「ダージリン茶」というのは紅茶のことではあるまい。ダージリンの紅茶は，同じ茶から採れるものだが，それはこの深い谷から沸き上がる霧の作用によって育つのであって，「大きな袋で売買される」ようなものではないからである。私が訪れた紅茶の製造元では，何種類もの紅茶を製造しており，「ダイヤモンドなんとか」という銘柄の紅茶は，小さな化粧袋に詰めた高価な商品だった。

著者がダージリンの紅茶について多く言及していないからといって，それを非難するつもりは

ない。同じ調査でも，それぞれ問題の関心事が異なるからである。

さて，ダージリンを見学したのち，著者たちはカルカッタ（現在はコルカタ）へと向かう。その間，もう一度シリグリあたりを通過し，ガンガの北側から南へ渡ることになる。

そこで著者は，不合理な国境設定，ガンガの洪水，東パキスタンからの大量難民，フェリーによる渡河の難渋状況，ミルクティ売りの少年とその価格の安さなどについて言及しているが，ここでは詳しい紹介を割愛する。

著者はコルカタで荷造や通関手続きなどの煩わしさについて説明しているが，それは別として，この多忙な業務を通じて，自分が旅行者ではなく，カルカッタの民衆と同じ感覚になったという意識の変化について触れている。旅行者がそうした感じになるのは，「その土地に溶け込んだ」という状況のもとで可能になるのだが，私の場合は一人旅が多いので，そういう経験はほとんどない。ただし，このコルカタでは何故かそんな気持ちになったという経験がある。もっとも，その時は，バラナシで知り合った若い日本人たちと一緒だったからかもしれない。

著者の長い旅「ユーラシア思索行」は，リスボンからこのカルカッタで終わる。印パ戦争の関係からか，急遽帰国することになるのだが，帰国までの期間に，マドラス，ハイダラバード，アジャンタ，エローラ，ボンベイ，デリーを経由して帰国している。しかしながら，この期間に著者の念頭にあったのは印パ戦争である。そのことと関連して著者は次のような文章を残している。それが，おそらく印パ戦争に関する著者の思索結果だと思われるので，長くなるが，それを引用し，論評して，本稿を終えることにしよう。

「国家間の問題を考える場合に，もっとも根本的なことは，いま自国の民衆の人間的解放をさまたげているものはいったい何かということである。それが宗教や社会的慣行や経済機構の足かせであるなら，それは自らの手で改新されなくてはならない。それが自国の権力の問題であるなら，それは革命行為に訴えられこそすれ，戦争行為で処理されるべきではあるまい。そして，その自らの革新の努力がみのったとき，それぞれの歴史遺産として伝統文化の中に吸収されるであろう」（257ページ）

上記の文章は，色川大吉氏の「思索行」のものであり，繰り返すようだが，印パ戦争がその思索の背後にある。従って，上記の文章を「国家間の戦争」と一般的に論じてはならない。そこで著者の思索の前提から離れて，以下のような私（杉野）の「思索」をすることも可能となる。

一口に「二国間の戦争」と言っても，内容的には，帝国主義国家間の戦争，小規模国家間の戦争，旧宗主国とそれより自立した国との戦争，旧植民地より自立した国と国との戦争などが考えられる。だから，「自国の民衆の人間的解放を妨げている」原因だけが，二国間の戦争の原因ではない。つまり著者の「思索」に加えて，『帝国主義戦争』の問題，旧宗主国と自立国との戦争などを付加して考察する必要がある。

敢えて，色川氏の文章が含んでいる問題点を指摘すれば，革命行為と戦争行為とを概念として区別しているが，それが同時的に行われるとも考えている点である。色川氏が革命行為は「戦争行為で処理されるべきではあるまい」と述べている点がそれである。確かに，氏の言うように非暴力革命が望ましい。だが，過去，そして現実は必ずしもそのようになっていない。即ち，革命には，戦争行為を伴う場合が多い。だから，色川氏が「革命行為に訴えられこそすれ」という一句が気になるのである。つまり，1917年のロシア革命や中国革命のように戦争行為をともなった

革命が，本来的に望ましい革命であったのかどうかという問題である。この問題の解答は，容易に得られるものではなく，階級制度が残る人類社会の歴史が続くかぎり，この問題は問題として続くであろう。

色川氏が率いる「どさ廻り隊」の旅もコルカタで終わった。それと同時に，色川氏の思索も私の思考もここで途切れた。これをもって，ユーラシア大陸の旅についての論考的書評も終えることにしたい。

あとがき

書評に「あとがき」があるとは妙だが，色川氏たちによるユーラシア大陸の旅は長く，そこでの思索も種々多様であった。しかも鉄道やバスなどを利用した旅ではなく，改造したキャンピングカーによる旅だったのでその労苦は並大抵のものではなかった。それだけに，その「思索行」の検討を通じて，私が得た歴史的，文化的，そして社会経済的知見は多かった。

本稿の「はしがき」では，色川氏の歴史的ないし文化史的な思索に対して，私は社会科学，とりわけ政治経済学という視点から検討し，論評するつもりであった。だが，実際には必ずしもそうとはならなかった。

色川氏は歴史的ないし思想史的接近という方法による思索をしており，どちらかと言えば，私のほうが工学的，あるいは現象論的な論調に陥った場合が多々あった。「観光」という点については，特に，その感がつよい。それらの点を整理しておこう。

その一つは，色川氏と私との歴史的認識力の差異である。日本の近代史はもとより世界の政治経済史，文化史などについて，氏とは私とではその知識量に大きな差異があった。感服の至り。

第二に，読書量の差である。とくに色川氏が本書で引用している文学書の多さである。それらは現代世界の動向に関するものであり，私はそれらを殆ど読んでいなかった。

そうした知的経歴の差異があることを，色川氏の『思索行』を読みながら，私は随所で強くそれを感じさせられた。

第三に，同じユーラシア大陸の各地を旅するにつけても，私の場合には「観光地」や大都市を巡検の目的とするのだが，氏の場合には必ずしもそうではない。著名な大都市よりも，むしろ辺鄙な田舎に訪れ，民衆との交流を意図していた。それが可能だったのは，「車」（キャンピングカー）を駆使し，集団で旅したからである。列車やバスを利用して一人旅を続けた私とはどうも「旅の感覚」が異なるようであった。

さらに言えば，私にとって未踏の国や地域，具体的にはトルコのカスピ海沿岸地域，イラン，アフガニスタンについては，「イスラム世界」という点で大概は想像できたが，実際には色川氏の叙述をあたかも自分の経験としてそのまま受け入れるしかなかった。

そうした感触をもちながらも，あえて政治経済学の視点から『思索行』に論評を加えるとすれば，以下の点である。

色川氏は，諸国および各地域において，そこでの富裕階級（支配層）と民衆を対立させて諸事象を分析している。多くの場合は，それで結構である。だが，政治経済学の視点から言えば，そ

の対立関係を階級的・階層的利害関係として，もう少し具体的に解明して欲しかった。しかし，それは「無いものねだり」だったかもしれない。

ともかく，本書は諸国および諸地域の歴史と文化，民俗などについて学ぶところが多かった。改めて色川氏の『思索行』に感謝する次第である。

そして最後になるが，著者たち「どさ廻り調査隊」の無事帰国を祝し，併せて，今は亡き色川大吉氏のご冥福を心から祈る次第である。

擱筆